

洋上研修船コーラル・プリンセス搭乗体験記

東京～香港～シンガポール（十四日間）の旅

嶋田正文

第一章、船上招待

イギリス人船長の主催によるディナーパーティーは、研修生を所属別の数ブロックずつに分け、幾晩かに割り振って行なわれた。総勢五百名からの研修生を呑み込んでいるチャーター船である。船名はコーラル・プリンセス、総排水量九六三九トン、香港船籍で一九六二年建造。岸壁から見上げたら巨船である。そうは言っても陸に比べれば狭いといえば狭いから船内での生活、例えば朝昼晩の食事など時間をずらして二交替制で摂る。全ブロック参加で一斉に行なわれるのは、鯨の背中並に広い最上階デッキでの朝の集い（ラジオ体操）やバーベキュー付きの運動会、それに大ホールでの結団式や研修成果発表会などであった。

さて、私が乗船し所属していたのは、研修費用の最安値クラスである第一線監督者コースだ。同船には他に、管理者コース、経営者コースがあった。参加人数が最も多い監督者コースには三八〇名がいて、A～Hの頭文字を付したハグループを構成、その内訳は七乃至八名ずつの約五〇班に分かれている。その中の一つ、私が班長を勤めるD8班（Dグループ第八班、以下略してこう記す）の八名は、船長主催のパーティー刻限が近づいたので車座の酒盛りを一旦中断、船室の床から尻を持ち上げてネクタイ、背広に着替えた。公式行事が無い限り船内では半ズボンとTシャツ一つで暮らしているのだ。

我々第一線監督者コースの居住区は、乗船ホール（船の玄関口）から階段でいうと四層階も下にある。与えられた各船室（キャビン）は、二段ベッドが二つ、旅行ケースが入るだけの簡易戸棚、そして隣り合う二部屋で共同使用する中間のトイレットルーム（シャワー兼用）が付くだけの小さな四人部屋で、八畳一間弱といった見当か、窓は一つもない。これら各船室は、船体外壁の成す形状に倣い曲率している狭い廊下（通路）に沿ってずらり並んでいる。この廊下は大人二人がやっとすれ違えるほどの幅で、閉所恐怖症の者でなくとも余り気持ちの良い通路ではない。地下の坑道的にくねり、向こう端が見通せないのである。又、通路のより内側は中国人ボーイ達の居住区や倉庫や厨房の一部になっていた。

部屋に窓が一切無い訳は、もしや我々のいるこの下層階は喫水線付近かそれ以下にあるのかも知れない。戦時中なら真っ先に魚雷攻撃で浸水する辺りだろう。船の強力な自家発電による騒がしいエアコンが常時ゴンゴン働いてはいるが、何せ水洗トイレもシャワーも海水だから、下層階は湿気が漂って蒸し風呂なみにジワジワと蒸す。

隣り合う二つの四人部屋から出たD8班の八名は、ドアに施錠し、他の班の連中と混じり合い、くねった狭い通路を最短距離の昇降口のある方へよろめきながら向かった。昇降階段にはメインとサブがある。元々前者は旅客用に幅広く単純にわかり易く造られ、一方後者はボーイや船員の素早い移動用に設計された物らしい。それでサブ階段は勾配急で幅狭く、互いの設置の位置関係が複雑怪奇だが、船内生活に慣れてくると思わぬ近道の発見が可能である。それを体が自然に覚えるまでサブ階段を使うと必ず迷子になり、とんでもない所に出てしまい帰り道も見失って船内ながら焦ったものである。

又、船の歩行にはコツが要る。船内至る所例外無く、外洋の大うねりを乗り越える船のピッチングとローリングの入り混じった揺れにより、足許の床は常にギーッと鳴って軋み音

を立ててかなりの落差で高下する。で、よろめくのを防ぐ為に一步毎をそっと踏み出して床の上下動をうまく膝のクッションで吸収するコツの習得を要す。乗船後この頃には歩行速度を落とさぬ程度にやっと馴染んだところであった。後日この状態で寄港地香港に再上陸したら、今度は足許の地面がグラグラ揺れ(陸酔い)目眩がしたから不思議だ。

サブ階段を登って素早く乗船ホールまで出た。今宵、英人船長主催のパーティー会場は乗船ホールより更に三層階上にあるので、次は幅広いメイン階段を揺らつきなが登らねばならない。上まで行って初めて判ったことは、客船構造というのは船底の居住区から上層へ移るほどその拵えが豪華になる設計であり、同じ船中とは思えぬ重々しい装飾や凝った意匠が施されている。つまり、船賃による上下サービス区分が明快だ。待遇の差別もここまで徹底されるといって可笑しい。パーティー会場入り口付近には、古き良き時代の名残と思われるキッチンな仕様のダンスフロアと、其処へのお誘いを示す、社交的雰囲気濃い柔らかな照明やエキゾチックな飾り付けが艶やかにも、ひっそり鎮座していた。我々の住む下層区画とは全くの別世界である。後で追々出てくると思うが、コーラル・プリンセス(珊瑚姫)という香港船籍のこの一万トン級イギリス船には、世間知らずの我々に馴染みの薄い、奇妙なスタイルが器物だけでなく人間についてもあれこれあるのだった。

例えば、すぐ気づくだろう。英人船長が我々を招待したこのパーティー会場で盆を持って立ち働く中華系下級ボーイ達は、全て騒々しいお喋りに聞こえる母国語しか話せない。彼らは異国語を受け容れず、イングリッシュも日本語も解さない。

そして、そういう下賤なボーイ等はこの場に見えぬかの如く、厚く広い胸を張った長身の美丈夫で、トランプのキング並に赤髭の立派な船長が、金モールの肩章付き正装を以って我々を迎えた。その隣には薔薇色の頬をして、副長服に身を包んだ船長夫人を同伴していた。夫人は船長の貫禄に比べていささか押し出しに欠ける平凡な英国美人だった。但し、そうばかりでもないことを知るのが道中の長い船上生活である、と此処で断っておこう。

実は船長夫人の彼女、中華ボーイ達が時々ギャングウェー(舷側通路)を使ってまるで気の無い火災出動訓練をやる際には、筆頭コーチ役らしく自ら男物の白い繋ぎ服の上下を着て夫の隣に現れる。その時の彼女は、まるでこの船の機関士長みたいに見えるのだった。

しかも彼女の繋ぎ服は、腰部の両脇ポケットの隣に縦長のスリット(切れ目)が入っており、だから風通しが良く、そこから十分に彼女の素肌の色が覗いている。それに何故なのか腰部の下着を一切着けていないのも同時に判るのだ。それを既に知っている広東語のボーイ達は、彼女の発する厳しい号令一下、ほころび顔でニヤニヤしながら消防ホースや手斧や赤い消火器等を持って出て一列にギャングウェーに並ぶ。デブ、のっぽ、チビ、若い、年寄りまで入れて六、七人以上だ。その際、彼らの素早い視線がチラチラ迷う先は、男だからやはりたった一ヶ所、至極分かりやすい。彼女の気紛れな号令に従うフリをしながらボーイ君達、実は彼女の着衣の下に覗け出る素肌を盗み見易いようあちこちへ動くのが、さも消火訓練に励んでいる風なのだった。だが当然、船上火災訓練にしてはその目付きに緊張がまるで足りない訳である。

眺める我々日本人の感覚では、これは火災訓練というよりも多分同性の話し相手のいない寂しい船長夫人の気晴らしと、一方、暇さえあれば麻雀牌ばかりガラガラ掻き回す運動不足の中華ボーイ達との合同レクリエーションに思えてくる。それに船長だって、まさかワイフが下着無しで素肌の丸見えなこと位は知っているだろう。それに気づかぬような男に大船の運転を任したら危ない。でも彼は、妻の白い腿に時々驚色の翳りが覗く都度、ボーイ達が広東語でもって「トォチェ(多謝!)」と叫び喜ぶのには、一向気づかぬ顔で平然と訓練を眺めている。訓練コーチ役の思いがけぬ奔放さを、夫が咎めぬ理由は、個人意志の尊重なのか国

民性の違いなのかよく分からない。この訓練にも、何やらこの貸し切り研修船の怪しきがあった。

その船長夫妻へ、各グループ単位で今夕の招待のお礼を言いに行くように、とパーティー半ば頃に研修の主催者から指示があった。実は、この立食ディナー・パーティーも船長の真心から出た招待じゃないことぐらい我々のうちの一部は判っている。招待目的は、年を喰った割に世間知らずのウブばかりが乗っている日本人研修生に、盛装のイギリス人船長夫妻と記念写真を撮らせ、会社や職場への誇らしい土産話とさせるためだ。だから見様によっては宝塚歌劇の麗人としか思えない船長夫人と並び、緊張した背を突っ張らす中年男の数がいかに多いことか、背丈はイギリス女のほうが頭半分も高いのだ。

この洋上研修は、人寄せの目玉商品として年に数航海を行ない大きな収入源とする、手慣れた法人組織が運営している。そもそも開始当初、その志は高かったかも知れないが私が乗った頃（一九七三年）はすでに財源確保のための一手段に墮しており、商業主義が見え見えになっていた。船内における無税の酒類販売も彼ら法人組織が独占管理しているのだ。

約二週間に亘る洋上研修は、見も知らぬ同士が八人単位で一つの生活班を組まされるのだが、お互い無器用で照れ臭さがある。だから日中の研修が終わったら、毎晩、いや秀抜なグループによっては一日の研修の始まる前、早朝から無税の酒を酌んで積極的に親睦を図る。だから我々は幾らでも酒が要るし、主催側はいくらでも捌けるわけだ。この船に積んでいる洋酒の種類とその量の夥しいことには驚かされる。が、今無税で飲まねば損とばかり悲しい性の各グループは毎日予約制の酒を買いに走る。主催者側は売ってやるぞという傲慢な態度にどうしても出る。それで結構でございませう、と我々は日本国内ではとても手の出ない「シーバス・リーガル21年」ものなどを毎晩ポンポンと景気良く開けてしまうようになる。なにせ乗船当初は「ジョニ黒様」と尊称で呼び、コップの底からチビチビ吸っていたジョニウォーカーの黒などは、やがてその内に灰皿の煙草を消す水代わりにする始末。これが宗教的戒律も道徳も何もかも失せ果て、全てが金次第の民族の末恐ろしい一面だ。

ところで主催者側の荒稼ぎはもっと凄い。この船には、行事のある度に勝手に写真を撮りまくる後で研修員に売り付けるのが専門の、見るからに質の悪い、食い詰め者の外国人カメラマンを何人か乗せている。外人という所が味噌だ。研修性はガイジンさんに撮って貰ったと言って有り難がり、ポートレイトをついつい買い漁る。彼ら不良外人が事の序でに狙うのは隙のある日本人女性の提供するモノで、当航海でも後で実際に誘惑事件が起こる。親切にされてフラットとなった日本人の女性を夜の甲板へ連れ出し、巧みに唇以上のモノまで迫った。自由恋愛にお咎めなしとのことだから雰囲気は何をどう与えようと我々には関係ないが、彼女の行方を心配した女性仲間からの依頼で、我がD8班が搜索、危ういところで現場を抑えた。そんなつまみ食いの楽しみしかないと知って尚乗せている不良外人からも、ちゃんと頂くべきカスリは頂くのだ、この船を往復航海分借り切った主催者は。

我がD8グループが英人船長夫妻に近づいたのは、順番が一番遅かった。ほとんど他のグループが船長夫妻と握手をして一緒に記念写真を撮り終えた後だ。それ以前D8班の全員は、キャプテンである私の指示で先ずしっかりと船底へ持って帰るつまみ類を紙ナプキンに包み、あらゆるポケットに詰め込んでいた。キャプテンの呼称は、班長と呼ぶ代わりに誰かがそう言ったので他の六人も乗船一晩目の酒盛りの最中から私をそう呼ぶようになった。厚切りの柔らかなサラミ、本物の生ハム、魚肉じゃないソーセージ、船で焼いた香ばしいパンを使ったミックス・サンドイッチ、キャビアやゼリーの載ったクラッカー、酒肴にいける胡瓜のピクルス、皮付きフルーツ等、液体以外のものなら何でもござれで、ポケットに忍ばせた。商店の無い船上生活ではこういう率先行動こそ大切である。

でも、食品会社から派遣された神経質で正直な内心の隠せない相沢さんと、ゴムタイヤ会社から来たグループ内で最長老の安福さんとが、英人船長との記念写真が欲しくて高級一眼レフを遠慮がちに取り出したので、それではそろそろ参りますか我々もとD8班は船長夫妻の方へ近づいたのだ。先ず三、四枚、船長を中心に撮らせてもらった後、一人ずつ船長とシェークハンドを交わす。八人の最後に私も握手の右手を差し出して笑顔でこう言った。

『サンキュー、キャプテン。ユーハバ、グッド、デインジャラス、シップ!』

ありがとう船長、貴方は素敵で危険な船を持っていらっしゃいます。

『オウッ?』とキング髭キャプテンの驚いたらしい反応。

こっちの下手な英語の発音が彼にも分かったのだ。でも驚く訳がある。

この船は只今、東京の晴海埠頭を出発して最初の寄港地香港へ向けて一路南下中である。だが一昨日の午後に内燃機関のピストンリングの一部が破損した。船の全エンジンを停止し、仮修理の最中に、此のコーラル・プリンセス号は鹿児島沖を数時間にわたり漂流。仮修理後、漸くよたよたと錦江湾(鹿児島)の入り口に逃げ込んだ、と気づいた船上の研修生は少ない。

主催者は、その故障が起きた日の晩、疑う事をまるで知らぬウブな研修生を大ホールに一堂に集めて熱く語りかけた。船は鹿児島湾に回り道をして修理している、そのためこの先のスケジュールに一部変更が生じる、お詫びの印として今夜これからバーでの飲酒は全てロハにすると宣言して大喝采を受けた。バカみたいな話だが、一命が懸かっているのに周りには主催者代表を気前の良い人だと盛んに褒め合う者が大勢いた。しかし我がD8班は、子供騙しのこの事態隠しには呆れ返り、フンと鼻を鳴らし合った。ピストンリングの故障に対処できる正規の交換部品は、皆が只酒に酔っ払った真夜中に鹿児島港から、小型船で湾口まで届けられる。もし万一これが洋上遙か彼方で起きた故障だったらどうするのだ。

皆は知らない。急に船のエンジン音が止み、船底の振動も音も失せた後、巨船が後方一キロメートルほど真っ直ぐに曳いていた白い航跡が、船足の落ちるに連れどんどん蛇行してゆくその不自然な様が、いかに心細いものであったかを。故障発生直後のこと、見るからに周囲の潮の流れは速かった。故障発生水域は大隅海峡のちょうど真ん中あたりだったと思うが、小さな海峡ですら、いくら見回しても陸影は見えなかった。

あの時我がD8班は、航跡の一瞥できる露天の後尾デッキで自習していたのだ。突然襲ってきた船上の静けさに何かの異常を感じて話を止め、互いに顔を見合わせ耳を澄まし、起こりつつある事態に呆然とし、後方の白い航跡が直線の帯から見る見るうちに歪み出すのを眺め入った。水に浮く物はスクリューが回っていないと、たとえ巨船であっても一枚の葉の如く容易に流されてしまうものだとつくづく判った。漂流という語は状況を実に適確に表している。主催者による船内放送があって、エンジントラブルだが大したことはない、と告げたのは三十分も後だ。だがその頃この船は行き足が完全に絶え、漂流の真っ最中だった。

だから、出港後じきにエンジン故障を起こすような年取った、この怪しい海のプリンセスを操り最終目的地のシンガポールまで我々を送り届けようとする英人船長の勇気に、一言お礼を申しあげておきたかったのだ。何といってもイギリスは、私の愛読するホレイショ・ホーンブロー艦長や、リチャード・ボライソー艦長が危険な任務下に活躍する、帆船時代の名キャプテン・シリーズを生んだ世界第一流の海国なのだから。

第二章 出発準備

プリンセス出港日の一カ月ほど前に一泊の事前研修というのが日程に有り、参加予定者は全国(と、敢えて言っても良い程の範囲)から神奈川県茅ヶ崎の某ホテルに集められた。私も会社の出張扱いで出掛けた。当日、会場ではパスポートの取り方とか、取得したパスポート

トを主催者へ提出する日程期限、準備し持参すべき服装や生活用品、寄港地活動の概要、それに船上生活の心得などが説明された。注意深く聞いていてもすぐ忘れてしまうような些事ばかりだから、何も事前研修など言って大袈裟にしなくても済む内容ばかりだった。但し、実はこれがお互いの初顔合わせが狙い目で、特に人見知りしやすい日本人中年男性に重要な事だ、と判ったのは当日の夕食の時だ。

夕食の直前、初めて主催者から乗船後に一つの班（グループ）を組む他の七人と同じテーブルに着くよう案内された。ホテルの食堂の各円テーブルには披露宴の場の如く夫々の座席を示す名札が置いてあった。座る時にそれを同班の皆さんに見えるよう向け替えてください、と司会に言われる。まるで小学校のPTA幹事総会みたいな雰囲気である。

各々の胸元にも大きな名札が付けてある。全く知らない他人同士だ。D8班のテーブルに着いた者は、年齢で三十代から五十代の後半までが混じっていた。お互いまともに目を合わせるのがこそばゆい。社交慣れた国の人なら、ここで自分の名と出身と経歴と趣味等をヤアヤアと名乗り合い、此処で会えて実に嬉しやナと盛んにシェークハンドだろうが、何せ固唾を飲んで堅苦しい我々日本男子、そうもいかず、先ずは班中の誰が一番年長であるか年功序列を無意識にそれとなく目の隅で探りあう。この時点で薄笑いを浮かべる者など誰も居ない。お互いが殊更固く、よそ行きの真面目人間を自然に装える習慣の出なので、誰もうっかり喋らない。

そこで、いきなり主催者から余裕たっぷりの通達がある。「食事が運ばれる迄に少し時間があります、各グループは相談の上、洋上研修を通じて勤める班のリーダー、サブリーダー、それに書記役を各一名ずつ決めておいてください」と。

そう言われてみて、成る程そうかそんなものが必要だろうな、とここで誰もが気づく。

日本人得意のお花見感覚で言えば、何時でも何処でも何に付けても重宝する宴会用幹事と福幹事とそれに会計係を選んでおく、ということが重要だ。幹事役の者に伝令や注意事項の心配を一切切任せておけば、他の者は楽しい洋上生活となるはず。

そこで初めて互いに一つの使命感に満たされた我々は、自分以外の者にその役目を押しつける隙を探すべく何気ないニコヤカ顔を用意し、互いの目を見合わせた。

「急にリーダーを選べゆうてもなァ、みなさんと今出会ったばかりやもん、お互いに何も知らんと、よ一分からしませんもんなァ」

ハハハハと軽く笑って関西系の柔らかさで先ず口火を切った人の顔を見れば、このテーブルの最年長者らしい。名札に安福とある。テーブルの皆がその言葉に重々しく頷きあう。だが肩に入れた力はまだ抜いていない。うっかりリラックスした姿勢等とれば場馴れしている者と見なされ、リーダー役を仰せつかってしまう。それは経験上で知っている民族だ。D8班以外のテーブルでも同じような様子見が起きていた。言葉は少なめ、コホンという咳払い等がよく聞こえてくる。最悪、書記役ならなくても良いかと私は思っていた。

「どうですか皆さん…」主催者の声が透った。会場内の低トーンを見澄ました調子だ。「初めてのことですし、中々遠慮し合っていらっしゃるようですが、一つ初対面の乾杯でもなさりながら名乗り合い、もっと気楽に話し合ってみてはいかがですか？」

おおっ、その手があったと皆の顔が輝く。そうだ手持ち無沙汰でテーブル掛けの白いシーツの裾ばかり引っ張っているのだから、ここは是非一杯欲しい場面だった。

「本日の研修費用に飲み物は含まれず申し訳ありません。ですから有料ですが、冷たいビールが後方のワゴンに適量用意してあります。自由にとっていただいて和やかにリーダーと書記をお決めになってください。代金は後で一括して頂きます」

こうなると、喉が渇いていた私は早い。それに班中で一番年下のように思えたから年上を動かしてはまずいという気が働く。周りを手で制し素早く椅子を引いて立つ。

「任せてください、すぐ持ってきます」と、この場から逃げ出せる嬉しさもあってビールの山へ急ぐ。見るとビールは中瓶だ。班仲間がどれぐらい飲める人達かまだ分からないのだが一度の乾杯の後で、もう瓶の底が見えるような状態になってはいかん。とりあえず一人一本充て有れば和む感じがするだろうと、お盆にビール八本を載せて持ち帰ったのはD8班が一番先だった。そうしたら留守の間に、リーダーも書記も既に決まっていた。

「あんたが素早そうやからリーダーをやらそうって皆がゆうてはるわ、遊橋さん。それならアタシが書記をやりましょう、いう事になって決まりましたわ。それにサブリーダーには、こちらの相沢さんがご自分で立候補しはりましたで」

乾杯の後、安福さんがそう言ってにっこりした。「ハッハ、欠席裁判やね」

仕方がない、一度決まってしまうと今更それを固辞したり覆そうとしたりするのは男として見苦しい。気楽になった周りのメンバーの気分が、今は軽いお喋りにはっきり現れ、この場が自然と短めな自己紹介に移ってゆくのを既にリーダーとして眺めている自分に気づいた。

人によってはずいぶん遠方から一泊研修の為だけにこの神奈川県茅ヶ崎まで来ているので驚く。会社はその往復の交通費だけでも大変だろう。一番遠い人は九州の博多からだ。他に四国の高知あり、兵庫の姫路あり、愛知の名古屋あり、そして残りは近場といえる関東の千葉、神奈川、群馬、埼玉だ。同県のダブりは一人も組み合わせされていない。

各人の勤務先も、ガソリンスタンドの所長、誰でも食べた事のある鰹節製造会社の検査員、日本で三本の指に入る海運会社の事務方、これも有名な自動車ガラスの現場の機長、CMでも知っている花らっきょう等の瓶詰を作る食品会社の係長、フォークリフト運転一筋で三十年のベテラン出荷係、N自動車追浜工場塗装の技術係、それにカメラ部品製造会社の経理員、と多彩だった。八人の業種も全く重なっていない。

私だけが勤務関連ではなく、小さな製造会社の企業内労働組合の出張命令で来ていると知れる。所属の労働組合が、私ともう一人の分を申し込んでくれたのである。後で香港に上陸している内に更に判ったが、彼らの中には同僚の餞別や、社長に直接頂いたポケットマネー等のお陰で、胴巻や手提げ鞆に百万円単位の現金を持ってきている人もいた。で、一旦上陸するとなると会社や同僚への土産選びが大変なのだった。

今テーブルにいる年長者は、長年勤めた会社から慰労の意味合いが強いのだな、と飲んで食事をしているうちに判ってきた。会社の取ってくれたその姿勢が羨ましい。しかもシンガポールに着けば、現地に進出した支店や工場や法人組織その他の心強いツテがあるという。私など、慣れぬトラベラーズチェックを入れても全所持金は十五万円に満たない小額だ。洋上研修参加費四十数万円也を皆の大事な組合費から出してもらったという負い目があり、この研修参加は私にとって遊びではない、頂いた分はこれから追々に何かの形で返さなければならない、すべからず贅沢はするな、と一線を画す気持ちがどうしても働いてしまうのだった。

この事前研修会は顔合わせが主目的だったから和やかな中に夕食が終われば、旅券取得関連の簡単なオリエンテーリングの後、もう各自の部屋に戻るだけとなった。これも互いの見知りのため同グループの一人と相部屋になっている。名古屋のF海運から来、年長の東梅さんと部屋が一緒だった。東梅と云うのは珍しい苗字だ。小作りな体つきで歳は五十前くらい、髪に白いものが混じっており、耳に心地よい柔らかな声質の人だ。そして人当たりがちっとも押しつけがましくないし、それでいて話しながら目の隅にちょっと人をからかうような悪戯っぽい笑み方もするのが魅力的だ。片方の目が少し藪覗み気味なのかも知れない。一遍に私は直感した。直感は観察より先行することが有る。この遠くを見詰めているような感じの人とならば何時間話しても肩が凝らないし、気が合うと思った。過去の不愉快な出来事にも傷付けられることの無かった苦勞人、多分それが東梅さんの他の人には無い一番優れた特長だ

と気づくのは、後日実際に航海が始まってからだ。

船上というのは密室と同じだ。航海に出してしまえば海へ飛び込まない限り、嫌でも集団内に自己を適応させて行かねばならない。今まで散々生きて来たのだから、それは簡単なことに思える。陸にいた時は長年の経験から第一線で部下を使い、うまく自己抑制していたように見える人でも、船上で一日中というか来る日も来る日も朝昼晩を通じてグループ員として密着し鼻を突き合わせて過ごす内に、本来その人の備えている魂のしこりの様な物、例えば微かな棘、他人へ無意識に抱く憎しみ、或いは募ってくる自己顕示慾、そして安易に人に寄り掛かりたい不安感など、そのようなものがジワジワと個人を圧迫し出す。

本人は、負のエネルギーであるそれらを抑えたつもりでも、外へ外へと顕すのが自身の内なる葛藤を楽にする手段なのだ。だから、自身が他へ放射する葛藤の余波に恐らく気づかないで過ごすことになる。一方、適応できたメンバーの何人かからは、何とかしてその不適応者から受ける被害を最小限に薄めようとする動きが出てくるから、人間はやはり社会的動物なのだろう。当の本人へ、チクリと皮肉を言う場合もあるし、逆に言いたいことを言わせてやろうとする場合もある。何故なら多くは自己を自由に表に出せないことが葛藤の原因であるのだから。

だが、そうはいっても葛藤の傾向が酷くなれば、班の他のメンバーにはその者の存在が重荷になってくる。それもいわば各家庭内と同様であって、他班の者の目には映らないし一切判らないのだから、人間の寄り集う密室生活は不自然だが面白いと云えば実に面白い結果をも生む。研修船に乗ってから私自身はそういう発見を経験でき、有り難かったと思っている。逆に、他者の心に少しも負担をかけずに居られた人も居る、それが東梅さんだったのだ。

茅ヶ崎でのこの夜はまだ初回でお互いの酒量も判らず、寢床に入る前に部屋の冷蔵庫のビールを二本ほど開けて余り当たり障りのない話をして早めに寝た。それでも、彼から聞いた話、F海運では新入社員の研修を会社の貨物船でオーストラリア迄の船旅に出すとのことに、つくづく羨ましいと思ったのを覚えている。それに、おかし味を解するこの大人しそうで上品な人から、自分は荒くれ者の多い沖仲仕出身だと笑いながら聞かされるまで、全くそんな事は予想もしていなかった。世間は広いのだ。自分が全てを知っているだなんて思わない方がいい。人と出会ってびっくりする貴重な楽しみが無くなる。

第三章 日本離港

快晴の五月九日、晴海埠頭の岸壁で制服姿の消防局音楽隊がキラキラ光る金管楽器を奏し始めた時、岸壁を埋めた見送りの人々の頭上には、コーラル・プリンセスの舷側やデッキと繋がる、恐らく一万本は越すだろう五彩の紙テープが海風に靡^{なび}いていた。既に研修参加者は通関を済ませて吊り上げ式の長いタラップを越え、接岸船の中の異国に居たことになる。デッキから俯瞰すれば岸壁は、僅かな隙間も無い程にひしめき合う見送りの群衆から、大きく振る腕と共に、

「元気でねー、気をつけてねー」の聲がそれぞれ盛んに沸き上がる。逆に船上からは、「さよならー、行ってきまーす」という声の餅^{こたま}が、陸上へ向かって投げ返されるのだ。

この私も岸にいる誰かとの間で張りつめた紙テープを何本か握っていた。岸壁に在る税関事務所で出国手続き後、すぐに乗船しトランクを仮置きしたら、今回同行の労組の先輩沢野さんが、これを投げましようと言って二十巻ほどの色付きテープを分けてくれたのだ。

私はそれを半分ばかり東梅さんに差し上げた。我々の見送りがいる辺りにテープを投げるため後部デッキに出てみたら、岸壁と反対側の寂しい舷に独り立っている東梅さんを見分けたのである。そんな所でどうしたのですかと尋ねたら、名古屋からの彼はこの港での見送り

が無いとのこと。昨夕新幹線の名古屋駅プラットフォームで見送りを受け、東京のホテルに前夜泊したので今はテープを投げる必要がない、とやや寂しげだった。

「じゃ我々と一緒にこれをうちの連中へ投げましょう。いやに沢山あります。外国への船出の気分を味わうには、ちょっと気恥ずかしいけれどテープを引き合うのも何だか良さそうですよ」と誘った。勿論、笑みを浮かべた東梅さんは頷いた。

それで隣には東梅さんも立ってテープを投げ、紙の重み分だけ垂れ下がっているが意外な程の弾力で張りつめる紙テープの一端を握り、ウチの労組の委員長や副委員長にサヨナラの手をゆるやかに振り別れの気分を出した。出航定刻に録音らしい銅羅の音が人々の歓呼に負けぬ響きでシャン、シャン、シャン、シャーンと打ち鳴らされた。

巨船コーラル・プリンセスが徐々に岸を離れ出す。そのうち、予想外に早く紙テープが岸と船との間で、斜めの大きな楕円弧を作りだした。紙テープの巻末を持つ岸壁の見送り人達が、紙が切れぬように残りをスルスルと繰り出すのが判る。だが、紙テープの張りは今やもう真っ直ぐにならず、紙が海風と船出との相乗効果で後方へ押しやられつつある。紙テープに益々擦れが入り、下の海面と付きたがっているように見えてきた。その頃、次々にテープが切れて長い尾がふらふらと縮みつつ、さっきまで巨船の占めていた海面に落ち続く様が見えた。

もうその頃には岸壁上の人々の顔の見分けがつかぬほど互いが離れてしまっている。出港での別れは意外なほど早い。本船から大音響でブオーッと出航合図の汽笛が二度、長く尾をひく。すると既に岸壁は彼方に遠く、大勢の人が固まって居る一塊として朧気に見えるだけとなった。

ここで改めて隣の東梅さんの姿を眺めてみた。彼の着用した背広は輝く銀色の絹地が高級で、仕立て方も吊しには無いスマートさが備わり、彼の年齢によく似合っていた。今、F海運でデスクワークに就いていると聞くが、結構なお金持ちに見えた。

一方、私の方は今回のために安物の吊しをちょっとだけ寸詰した、身に添わぬだぶつき気味の青い背広だ。それに今朝早くからの慣れないネクタイ着用で首筋が凝っている。うんざりしていたが、事前研修で注意を受けた如く出発時の背広姿はこの直後に船内大ホールで行なわれる結団式終了まで我慢していれば良い事になっていた。

既に各人のトランクは居住する船室の縦型の簡易戸棚へ押し込んである。乗船直後は正式な結団式が有るらしいが、その後は気楽なTシャツに着替えてオリエンテーリングと夕飯。他に格別な行事は無い。

オリエンテーリングの内容だが、極めて詳細な研修日程の説明（寄港地活動で訪ねる企業名など）、それに船内で定例的に行なうクラス別の講義場所、食事のシフトと順番、病気になった時の相談先等々、どうせ最後に書類をくれたのだから聞いた先から忘れてしまっても良い内容ばかりだった。但し最後の説明、これが終わったら直ぐ受付を開始するという船内酒類販売の申し込み制限事項だけは耳を澄まし謹聴した。それによれば、一日当たり一班が買える酒の本数制限に要注意とか、よーし判った。お陰で我がD8班は真っ先に作成書類で申し込み、真っ先に酒を受け取ることができた。その時点で既にアイスバンク（製氷器）が船内の何処に設置してあるかも入念に下見してあった。

前回の参加者からコツを伝授されたと云う班員の一人からの情報提供も耳から逸らさない。それは、部屋の掃除に入ってくる係の中華ボーイに何がしかの額を初日に渡しておくで後々のサービスが良いらしい。情報が当てになるかどうか判らぬが、これは外国船での慣例だろうだ。だから取り敢えずD8班員の寸志を千円ずつ集めておいた。

するとその内、二五〇ボルト直流の差し込み口とか灰皿やゴミ袋、アイスビッチャーの配り忘れ等を再確認するみたいな感じで何食わぬ顔で入って来た中華ボーイがいたから、相手

に失礼にならぬよう笑顔で千円札の束をそっと差し出してみた。すると言葉は通じないが広東語ボーイの手の動きの素早いこと。遠慮なんか丸で無い。「後ハ金テ任スヨロシ合点ネ」という感じの笑みをしたと思うやボーイ服の黒ポケットへと金は消えた。あの金は、後で他の部屋からの収入分も含めボーイ達の間で均等に分配されるのだそうだ。

やはり植民地時代が長いと客とボーイとの間の呼吸も要領も違う。これを知らなかった別班では、毎朝起きて戸を開ければちゃんと部屋の前に氷たっぷり入りのアイスジャーが供えられている贅沢を味わえないのだ。この中の氷水で、夜まで喉を潤し、朝から起き抜けの一杯にブランデーを飲み、冷たい追い水を喉に流し込むことができる。洋上では真水がいかに貴重であるか二、三日乗っていれば判る。そして日本と違って相応のサービスを得るには正々堂々とチップが要ることを、この先の寄港地でも学んだ。

もはや海上にあるコーラル・プリンセスの船内は、進行位置が日本沿岸（三浦半島の沖辺り）であっても法的に日本国ではなかった。アイスバンクの所に行って製氷をどっさり吐き出させた時、その隣の自販機では日本製缶ビールが国内の半値で買えるらしいことが判った。まだ他のグループは誰もここに来ていないからD8班が一番乗りの筈だった。物は試しと自販器に表示額分の硬貨を入れてみたら、何とガチャンという小気味いい音で完璧に冷えた日本製の缶ビールが出てきた。

メーカー一品で小売価格が当時二二〇円する筈の物が、なぜ半値以下に安いのか、と思わず手に取った。缶ビールを吐き出したのは日本製のやや旧式の自販機だがこれは酒飲みの夢ではないか。まだ日本の領海内なのに今早まって買ってしまっているものかと周りを見回し、税金無しの安さに心戦^{おの}かせつつ、手早くあと何本か買い足してしまった。

要領の飲み込みの好いD8班の各メンバーが、すでに自発的に飲み代として一人一万円ずつ班長を信用し供出してくれたから恐いものは無い。一カ月前に初めて会ったお互い八名が、この間には色々な準備や出来事があっただろうけど今日無事に全員が顔を揃え、今はいざ共に船上に乾杯せんとしている。これを有り難いことだと思った。

というのは、今次私と同行することになった先輩の沢野さんは、急遽たった七日前に代役を指名されたのだ。他にもう一人来るはずだった予定者は、直前に病父が亡くなったのだ。だから土壇場での急指名にもめげず旅券取得に走り回った沢野さん本人や、その後の手続きを行った組合本部の準備は大変だったはずだ。口で言わないだけで、他のメンバーの誰彼にもそんな支障があった末の無事乗船かも知れないのである。

出航の日の朝、沢野さんが自家用車で私を迎えに来てくれた。二人が組合の備品から借りたサムソナイトのトランクを二つ積めるかと思うような小型車だった。駅からは彼の奥さんが一人で運転して帰るので、敢えて小さい方の車で迎えに来たのだった。

一番電車に間に合うよう駅に向かったが、途中、その車と同じように身体の小さな奥さんが助手席からこちらへ振り向き、町の市民合唱団員の愛らしい声で、「主人のこと、よろしくお願いしますね」と言った。

とんでもない、現にこうして迎えに来てもらっているざまなのに。でも、奥さんはもう一度、前を向いたまま同じことを言った。そうか、出掛ける本人よりもそして組合幹部の誰よりも、急な出発決定で一番不安なのはこの奥さんだったのだろう。

六時発の急行電車では東京の晴海までが近すぎる気がしたが、いや、途中で何が起るか判らぬし、港での出国手続きもよく判っていない。早めに出ようと云うことになっていた。奥さんは、今朝はご主人に何か食べさせることで手一杯だった様子だ。台所からエプロンを外して出てきた姿なのである。顔見知りの夫婦なので軽い冗談を言うと、奥さんは、あなたは随分のんきで好いのねと云う意味のことを、恨めしそうに呟くのだった。

駅前は、規則があって車からは離れられない。それでも早朝だからタクシーもいず、奥さんが降りて頻りに何か言うのを沢野先輩は面倒臭げにフンフンと頷きながらトランクを手早く下ろす。すぐ後ろから他にも一番電車で夫を送ってくる車が何台もある。現代の旅の出立は別れを惜しんでゆっくり話してなどいられないのだった。

「じゃァ、行ってくる」彼が答えたのはその一言だ。

もう背を向け行きかかりそうな夫の目を見、無言で頷いた奥さん。だが暫しの後、その奥さんが運転席で前を向いて車を発進させたのを、改札口の中からチラッと見やった沢野さん、一つフツと溜め息を吐くや解放された如くこう言った。

「車庫入れの時、時々こするんだ、彼女。さて電車が来た、我々も行ってみましょう」

第四章 宴の数々

毎日一定手順でもって繰り返される生活スケジュールは、船酔いしない質の者ならすぐに慣れてしまうだろう。陸と違うのは不変極まりない床下からの揺れのせいで、少ない脳味噌が隙間分だけ更にユラユラして簡単な暗算もしにくくなることだ。そんな訳だから勿論、判断したりする思考の速度も鈍る。でも、ざっと船上の一日はこうだ。

- 06:45 起床 (狭い船室で朝のオンザロックを先ず一杯)
- 07:15 朝の集い (屋上デッキで体操/D8は半数が不参加)
- 07:30 朝食・大食堂 早番 730～
遅番 810～
- 08:40 船室から研修の各集合場所へ移動
- 09:00 コース別研修開始/班別自習 (二時間半)
- 11:30 休憩 (自船室で昼前のオンザロック一杯)
- 12:00 昼食・大食堂 早番 12:00～
遅番 13:00～
- 13:30 船室から各集合場所へ移動
- 14:00 コース別研修開始・班別自習 (三時間半/デッキの日陰で昼寝付きも可)
- 17:30 休憩 (今夜の酒の予約に走る/氷の用意)
- 18:00 夕食・大食堂 早番 18:00～
遅番 19:00～
- 19:50 課外活動 (各クラブ参加/酒盛り)
- 21:30 自由時間 (酒盛り/洗濯)
- 22:30 就寝準備 (酒盛り)
- 23:00 就寝 (酒盛り継続可)

此れを見て、なんだ一日に研修時間は午前と午後で計六時間しかないじゃないか、そんなものしか勉強しないのか、と思うのは間違っている。そう考えるのは(此の)船に乗ったことが無いからだ。研修というとすぐ講義と思うでしょ。其処がもう違う。うねりを乗り越える船の揺れで頭が働かないのだから六時間も講義なんか受けていられない。

ここでいう研修というのは、ちょっぴりだけ講師の補助するお話を聞いたら、あとは班単位で好きな所(船内の何処かを選ぶ)へ行っても互いに座ったり寝そべったりして研修テーマについて好き放題に、至極ノンビリ、且つまた延々と語り合うことなのだ。

そういう目でもって、もう一度このスケジュール表を見直して頂きたい。すると、やたら

に休憩があるのに気付かれるでしょう、食事の早番遅番の間にも余裕があり、課外活動などという意味不明な予備時間がある。飽くまでも陸上にいる正常な者の目で見てもいけない。

陸から来た講師陣だって、絶え間ない船揺れで脳味噌がユラユラしているのだから、午前少しお話したら即、研修生の皆を解放し、あとは皆がこのスケジュール通りやってくれているとの前提で講師自身もノンビリと時間を過ごすのだ。稀にすら、生徒の研修ぶりを見回りに来るような馬鹿はしない、だって五〇班もの人間が散らばって広い船内の何処にいるか調べようもない。それに陸と違って生徒が教室から何処かへ逃げ出してしまう筈も無い。

(もっとも翌年シンガポール手前の洋上で研修生の一人が、誰も知らないうちに多分、海へ飛び込んでしまった。「多分海」というのは船内の何処にも見当たらなくなったからだ)

グループ各班は、午後の研修終了の五時半頃になると三々五々何処からともなく講義室(これは三、四カ所ある)に戻ってくる。戻って来ないグループについては、いまだ熱心に研修中であると見なされ、今日はこれにて完了の挨拶を臨時の師弟で済ませる。

講師陣は、定年退職の済んだような忙しくない人が来ているらしい。そうでもなければ船出後に十四日間も乗ってられる筈がない。だからヤイのヤイの詰め込み勉強をさせようとはしない。講師自身の体験からこう言うのである。「小壮学び難く、でも学ばなくたってガツガツ学んだって、そんなに変わらんですよ。持って生まれたその人の人間性と云うものは不変ですな」等と人生論風に助言してくれるのだった、白髪頭を独りニコニコ頷かせて。だから例えばその老講師は、下船後の帰途シンガポールのチャンギー空港から飛んで成田へ降り立った後、独り京成電車で素早く乗り移り、洋酒をぎりぎり無税本数分だけぶら下げていた。研修生達がまだ空港税関で大荷物の中身を開けられていた間に。

一日目よりも二日目と段々定型スケジュールに体が慣れてくるにつれ、研修生は自分が今一応束縛を受けながらも、乗船前には深く思ってもみなかった二週間にも亘る気儘な時間を過ごせるチャンスを得たと気付き出すのだった。此処には従来いつも自分の身を取り巻いて何らかの形を取っていたシガラミというものが一切無く、それこそ自分と一緒に在るのはこの身一つだけ。何かせねばならないと常に自分を背後から前へ前へと押しやってきた一種の強迫観念が消えており、背中が其の分妙に軽く、それが何やらくすぐったい感じなのだった。で、不意に理解するのだ、あ、これから日本へ戻るまで自分は、何者も追いかけて来られない遠い所にいる、と。この先二週間と云えば無限のように長いのである。船揺れのせいで厄介な計算を放り出した頭が、微笑みながらそう言うのだ。殆どの者にとってその解放感覚は初めての経験だっただろう。

洋上での研修テーマと云うのが又、埒も無いものだ。グループの皆で好き勝手に話した内容に後で適当なテーマ名を付し、模造紙数枚に纏め、これが研修成果ですと発表するだけ【で】いい。正解も不正解も無し、且つその内容が誰かによって是非を問われることも無いそうなのだ。研修面では大安心である。で、いい歳をした男達が俄然ガキっぽい集団に変じてしまう。いや、大人の立場の都合良さは残しながら、洋上では何の不利益や不都合も互いに持ち合わせぬ者同士だから、結果としてチーム内は、遊び盛りの子供の付き合いの様相を呈してくる。

それも、班員の各個性の出具合次第で自ずとチームカラーが決まってくるのだった。

ちなみに周囲を見てみると各チームによって付き合いの仕方は色々だ。午後の研修が五時半に終わって、もしその日が遅番の夕食なら七時開始までデッキに車座になって熱心に話し合いの続きをやっているチームもあちこちに有るし、囲碁や将棋室の遊びに集まるチームもある。何が面白いのかひっそり真顔で討議している下層船室もあるし、そして音楽室でのど自慢大会の余興に向けたハモる練習をするチームもある。どれも制約は無く、色々様々だった。

我がD8班はどうかという船室の床に座り、今日もお互いにご苦労様でしたと乾杯の音頭で酒盛りを開始する。だから研修が終わると毎日真っ先にキャプテンの私は、昨日と違う銘柄か或いは皆がこりゃ旨いと言った銘柄の酒を申し込みにゆく。その間に誰か（東梅さんのことが多い）が製氷をバケツ満杯に取ってくるし、ツマミは各自が家から携えてきた物を適宜に持ち寄る。何せ我が班には食品会社から来た相沢さんがいたから、只今試作中だと云う珍しい瓶詰も出てくる。まだ壇に登録商標ラベルの貼られていない牛肉と茸の佃煮、鶏の肝を何かに包んで香ばしく煮た物、そして根生姜とオリーブみたいな実を甘酢に漬けてある物等を、こんなので良かったらと提供された時は一同びっくり。試作品は大好評だった。今頃、既に商品として市場に出回っているかも知れない。

他のメンバー達も何故こんなに色々沢山のツマミをと呆れるぐらい持って来ている。つまり他に芸の無い酒飲みの楽しみからだ。かくいう私もちゃんと持って来ている。揺れる通路を歩きながら他の部屋を覗くと判るが、ツマミの乏しいチームだって結構あるのだ。あれは陸では余りお酒を嗜む人達でなく、それがたまたま同じメンバーに組まれ、船内では他にすることが無いから油がわりに舌へ酒を差しているのかと思われた。

D8班は夕食を済ませて居住区に戻ると再び酒盛りをする。中でも仕方話が一番うまいのはガラス会社から来た機長（自動車のフロントやリヤの曲面ガラスを成型し切断する機械の責任者）の原田さんだ。仕事の話でなく、男女間のことに関してガラス会社内で集めた実に含蓄ある幅広いエピソードを披露する。また、酔いが回るにつれて彼は酒壇を股間からブラブラ垂らして自作の春歌を披露、更に即興で、二段ベッド内で踊る究極の隠し芸を切り札に出す。お坊さんになれそうな彼の人が珍妙な踊りを卑しく見せない。大型ガラスの製造現場を仕切るには、これ位にくだけた猛者でないと勤まらぬようだ。昼に研修テーマを話し合っている際に窺える職場内での彼の動きぶりはかなり厳しいものがあるのだ。

D8に原田氏の居たお陰で、これまで一度も羽目を外したことが無かったと自身云う食品会社の神経質な係長相沢さんが、ついに志願し、酒壇を股間にぶら下げる究極芸を習いだした。酒壇は口許側を両腿に挟み、同時に尻から回す手の補助を借りて、あたかも逸物が太い頭をむっくり擡げつつ踊りながらあちこちの女を見回している様に演者が仕立てねばならない。習って即出来るワザじゃなく中々難しい。でも自身を越えたくて相沢さんは必死で見習ったのである。

「ノンノコ、ノンノコ、ひん絡めってキャッ、キャーベツでホイッホイッ」と不思議な終わり方をする春歌も彼は覚えた。もしかしたら、いや多分既に食品会社の宴会の場で披露されていることだろう、但し酒壇ではなくケチャップの大壇か何か使って。

そうだ、酒のツマミの話といえば酒壇ノンノコ踊りを伝授した原田機長が、最初の寄港地香港を出港後、漢方強壯薬を酒宴のツマミに試してみようと云って取り出したことがある。これは彼が繁華な香港の漢方薬店で仕入れた物だ。日本語も英語も全く通じず困っている彼を見て私が一計を案じ、二の腕に力瘤を作る真似をして店員に「グングーン」と一言いったら、途端に手代は理解し、顔を崩し大喜びで一番奥の方へ誘い、さあ見ろこれだとばかりガラス戸棚からごっそり品物取り出してきた。全て男性の強壯薬で、見るからに能書きの文字も麗々しく、私は原田さんが当てずっぽうに何種類か七、八箱も買うのを傍で眺めていた。

それを今、彼が船室で取り出したのだ。その薬効を一刻も早く試したくてたまらぬ彼は、実はシンガポールのマングリンホテルの一階フロアーで極め付きの美女が交渉に応じるといふ精度の高い職場情報を得て乗船してきている。漢方薬店で実績を上げた私はその異国美女と交渉する通訳係を既に頼まれていた。格式ある有名ホテルのフロアーにその手の女性が出没するとも思えぬが、日本で有数のガラス会社の既得情報だから、まるきりガセネタではないだろう。原田さんの買った秘薬の一つは結構高かったし、異国の美女を恐れぬ彼の意気込

みの程が知れる。

さてその薬だがパッケージが恭しく、しかも派手なマークの何とか王と封印された小箱を開けて、銀紙に包まれたピンポン玉ほどのもの剥くと粘土質の茶色い薬包が出てくる。この粘土は薬効を封じ閉じ込める役目があるらしく、「さすが文明の源中国、これは効き目がありそうだ」と原田さんは云いながらナイフで二つ割りに切り込んだ。

すると粘土の囲みの中央にビー玉よりかなり小さい真っ白い球が現れた。D8班の皆が中国六千年の神秘とは此れかと見守る中、原田さんは白い小球をも断ち割った、ピツリ八つに。そして彼はそれを黙ってズイと宴座の真ん中へ押し出したのである。その時まで円い座の一同誰もがまさか自分がそれを口にする事になる等とは思っていなかった、しかも、アルコール度のきつい洋酒のツマミに得体の知れぬ男性用の強壯薬だ、大丈夫だろうか途端に心配になった。

「これを食えば男性の精子製造作業が活発になるはず。玉が重く成る程かどうか試みましょう、皆さんもどうぞやって、さあやって」原田氏は盛んに勧めた。

「原田はん」と照れたのは長老の安福さん。「これは、このまんま服用するものやろか。えろう苦そうやし大丈夫かいな。利き過ぎて鼻血でも噴き出たら、あたしらどないしょ、シンガポールでも売っているんかいなァ」何だか嬉しげに欠けらを手に取った。

秘薬の断面は褐色で、餡と似ていた。よく味を確かめもせずブランデーで一気に流し込んだ。すると飲んだばかりなのに、もう利いてきたような気もした。よーし明朝はこれでもうビンビンだぞ、などと皆が云って腕の力瘤を見せ合ったりしながらノンノコ節を全員で唄い踊り、船室の夜は更けていった。

翌朝、集合七時一五分の朝の集い（ラジオ体操）をD8班全員が休んだ。肝心の秘薬の効き目の兆候は微々たりとて無かったが、全員ひどい二日酔いで頭の芯がガンガンした。事このように色々な宴を経たものだ。

第五章 ジャンク（機帆船）

東京出港後、五日目に香港着という当初の予定は、例の鹿児島沖の機関故障により約十一時間遅れとなった。だが、その遅延のお陰で素晴らしい眺望を得ることが出来たのである。本来ならば夕刻五時丁度に香港接岸のスケジュールがずれ込んだ乗船コーラル・プリンセスはその翌日未明、香港に通ずる水道へ滑らかな航跡を曳きながら入っていった。

夜明け前、誰かが我々D8班を呼び起こし本船が既に狭い海域にいると教えてくれた。久しぶりの景色変化だ。我々はギャングウェー（舷側通路）へ階段を駆け登っていった。見えた。うすら明けの入り江のような水面を本船はかなりスピードを殺ぎながら遡行していた。眼の下は海面なのだろうが両幅が狭いので進行中の隘路は中規模の河川のようでもあった。水の表面に早くも微かな曙光が映り、船波の走る黒い皺を置き並べていた。風は草の匂いを孕みギャングウェーを駆け抜けている。微速前進のようでも本船の航行はかなり速いのだった。

そのうちに舷側の右下を前方から来るジャンク群が掠め出した。かなりのスピードで沖へ向かっている。香港方面から出てきた漁師の船だ。船外機の付いた機帆船で飛ぶように行き過ぎる。帆の張り方は日本では見覚えのない龍翼を後方へ傾がせた力強い方式である。船尾に幼児がいた。日本の子が朝食に椅子に座るような感じで何かの横板に腰掛けている。一艘だけじゃない、来る船、来る船に幼い子が乗っている。母親らしき女性も必ず乗っていた。一家総出の出漁であろうか、日本人の目には物珍しい。しかも船尾では母親が甲斐甲斐しく煮炊きしながら飯の準備をしている。機帆船の居住区を改めて眺め下ろすと、どれも単なる

漁船ではなく一家がその船上で生活を共にしているのだと分かる。すれ違う時に向こうもこちらを見上げるが、珍しくもなさそうな顔をしている。炊事の紫煙を引きつつ来る機帆船は、それこそ切れ目もなく次々に現れた。この日の夕方、香港の街角で、むき出しの生魚を何家族かが路傍で売っていた。多分ジャンクで獲ってきたものだろう。

珍しいのはジャンクの群れだけではなかった。両脇に広がる岩礁混じりの水路風景も中々の見物であった。海面に現れ出た幾つもの岩脈があり、その間の一番広いところを本船は走って行くが、周りには幾列もの開けた水路のあるのが見えた。其処をも小さなジャンクは巧みに使って沖を目指す。本船のデッキが高いので、幾筋もの水路が見渡せて刻々と色合いの変化する夜明けの海の眺めは神秘的な生き物にも思え素晴らしかった。岩礁脈は真っ黒で、その狭間の水路は干満の差か波のうねりが潮流の速さをはっきり見せていた。そして本船の後方へ目をやれば、幾つもの水路は結局、水面に連なる小島の間へ一つに収斂するかのようにならなくなっていった。遠くの方はまだ夜が明けていず海面が暗いのだった。

また、この水路周りの岩礁帯や平たい陸のような所に人家の灯は無かった。程よく冷えた朝風の流れに顔を反らし上げ、前方へ眼を向け直すと、そこに摩天楼の居並ぶきらびやかな都市景観が既に闇から浮かび出していた。地震の心配を知らぬ香港の高層ビル群がそれこそ細長く林立し、自身の放つ灯火で紫や茜色に輝き合っていた。摩天楼群はいきなり海から立ち上がった感じで、人工繁殖の茸みみたいに夜闇の空間を埋め尽くしていた。今、本船の周囲には薄明中でのみ見られる景観美が現出しているに違いなかった。残念ながら二度と別の機会に恵まれる幸運はあるまいが、恐らく今が一番美しいと思えたから幸せだった。

同日朝七時過ぎ、周囲は水面が開けて潮の色が昼のように明緑色になり、本船はいよいよ香港の港内水路にまで接近。辺りの水面は数多くの白い航跡の交錯によって揉まれた人工のうねりが起こり、賑やかに活発に波立っていた。通勤客の足であるスターフェリーやその他訳の分からぬほど活気ある多くの船が、薄緑色の波を蹴立て港内を左右に突っ切る。本船前方にそれらの船が切れ目ないくらい彼方まで重なり航行しているのだった。その透視図法的な眺めはちょっと忘れがたい物で、多分に奥行き深い入江の美しさのためだ。

香港、これは日本で考えていた港の形、つまり船寄せ場を防波堤で囲い、海の脅威から護る築港式とはまるで違うのだ。香港、これを目の当りにすると日本沿岸にいかにも自然の良港が少ないかを痛切に理解できる。海洋を何十日も旅してきた船がいよいよ陸地を視認した時、香港の如きたおやかな自然港に抱かれたならどんなに安堵することか。かつて日本の鎖国時、長崎のみ外国に開いていたが、元々南蛮貿易が長崎近辺で生じた理由は、少なからず長い航海後の目を慰める利便もあった筈で、地形も此処と少し似ている。

香港、此処は物凄く幅と奥行きに自然の成す魅力ある入江だ。水の色からして水深もかなりあるようだ。この混み合う水路の真ん中で巨船が何隻も回頭することすら差し支えない程の広さだ。狭い所では幅五百メートル程に括れているが、すぐその隣には千五百メートル四方ほどの操船余裕があり、外航船棧橋もそちらに在る。スターフェリー発着棧橋の望める左手の香港島との間に挟まれた、幾らかくねる入江のような海域が、天然の良港を形成している。暴風雨による高波の被害を蒙ることも少ないのではないか。この絶好地を東洋の一角に見つけ百年前に分捕った英国の魂胆は、取った手段はどうかあれ確かに鋭い、と合点がいった。

その返還期限があと十数年後に迫っている。ここに来るまでの船中で或る一夕、香港の経済人の方から特別講演があった。中国へ返還される前に今、香港ではアメリカやその他の外国へ財産と家族を移すのが流行っているという。例えば、娘をオーストラリアへ、息子をアメリカへという具合に。何故なら祖国へ返還後、中国共産党の出方次第では香港の自由市場経済がどうなるか判らない、と悲痛な顔で聴衆に訴えていらっしやった。なるほど一理ある。一方、お金や財産の少ない一般庶民はその変化予測を気にしていないのではとも思われた。

しかし日本と違い決して一億総中流ではない香港人の持つ発想自体強靱だ。即ち個人が国から身を守るため家族を国外へ脱させしてしまうという世界性、つまり独立不羈の匂いの強い香港には日本人よりかなり世間擦れのした連中が巣食っているという訳か。

本船がやがて接岸する筈の右岸にある長いプラットフォームのような棧橋（建物）は、その前面を派手な企業広告の看板で埋め尽くされていた。中でも日本企業のロゴが多く、サイズも巨大だ。日本の有名企業の物だが、ロゴを見ると気恥ずかしい思いに駆られるのは前大戦で近隣国に迷惑をかけたことの引け目が意識の底にあるためか。逆にもっと堂々と胸を張り、ああ敗戦日本はいまや復興し世界と互角に競争していると誇るべきか、或いは国威が上でも下でも好いじゃないの国民一人一人がしっかりしていれば、という観点に立つべきか迷う。

その辺の含羞を、洋上研修の主催者は気にしていないらしい。下船したらまず両替をしたい皆さんへの注意事項を船内放送で再三流している。要は我々を単なるお上りさん扱いにしている。何処で両替すればレートが高いかなど、ケチ臭い国民である事を何度も放送で聞かせる、いやこっちも全く聞きたくない訳じゃない、私だって新たにD8班の皆から預かった軍資金八万円也を、出来れば一香港ドルでも多く替えられる所に持ち込みたいのだ。

第六章 香港的大酒樓

香港での第一日目は、研修生全員で渡船スターフェリーを使い本土側から香港島に渡り、夕闇のビクトリアピークにケーブルカーで登る観光もあった。その帰りに貸切バスで海底トンネルを渡ってから、車窓に見当たった賑わしい夜の街頭で物は試しとばかりオプションツアーの順路から我々D8の有志だけ降ろしてもらった。知らない裏通りをおっかなびっくりで歩き、目線のきつい売り手のいる路地裏のマーケットを覗いたり、表通りの八百屋では珍しい果物、例えば唐代の楊貴妃がこれを好み毎日南方から取り寄せたと云うライチの赤い実を、ごく安値で一山買ったりしながら香港のほんの一部を眺めた。

しかし第一日目の昼は、一度に五百人が研修の一環として続々と列を連ねるチャーターバスで、香港と中国本土との間の何もない国境地帯を高台から眺めに連れていかれた。その戻りだったか、企業見学と称して埃っぽい宝石の切削加工場、且つその直売場に寄ったり、又は何とかいう香港の売薬王の大金持ちが造ったという狂気じみた装飾の並ぶ大庭園に入ったり、或いはそのすぐ隣に、ぼろぼろなスラム集落と人気歌手の豪邸がある対比を説明されたりしたが、勝手に用意されたそういう見物事は詳細をみな忘れてしまった。

但し、その一つ一つの公式行事に現地の旅行社から派遣されたカメラマンが我々に抜かりなく付いて回ったのは覚えている。パシャパシャと勝手に人の顔を写して、それを驚くほど素早くカラー現像してくるシステムになっている。更にズームアップの肖像写真を無地の大きな陶器皿にカラーで焼付け、それを売りつけに来るのだから、彼らの商魂に恐れ入る。さすがにその陶器皿だけは買ってやらないと無駄と思えてきたほどだ。現地の人は悉く商売優先むき出しなので、行事名で連れて行かれる何処を見るのも嫌になる。

例えば、ビクトリアピークで見下ろすネオン瞬かぬ香港百万ドルの夜景だって、四季の変化豊かな日本から来た目で見るとものの一分も眺め降ろせば充分。その後はハイハイ大変ゴチャゴチャ混んでいますね香港は、可哀想に此处も東京都心と同じです、土地代、アパート代さぞ高いことでしょう、きっと土地転がしでバブルが起きているな、日本の真似などしないほうが好いですよ、という気持ちになるだけだ。こういう密集風景を見たら、確実にこういう反応を示すのだ。日本じゅう津々浦々示し合わせた如き掻き集めの都市造りで、幼児期から常にスリコミ教育されてきたのだから無理もない。

では、その旗振り役の雄でもあるマスコミ（テレビ、新聞、ラジオ、週刊誌、盗み撮り雑誌、評論家等）から洗礼的な影響を受けていない未開発部分に、新たな刺激を受けた日本人がどういう行動を取るのでしょうか。寄港二日目、D8班のメンバーだけで土地勘も覚束ない昼の香港の街を歩き始めた時、それがはっきりした。多分、我がD8班だけの特異な体験ではなかっただろう、以下に書くことは。

先ず、そこが香港の何処だったのか全く判らないことを最初に断っておかねばならない。

ネイザン・ロードとかビクトリア・ロード等のイギリス流標識と並べて、中国流に別命名の漢字標識が付してある香港のいったい何ストリートを歩き出したのかD8班の誰も気にしていなかった。まともな名の付いた通りが日本にほぼ無いから、往来名に注目するチャンスが無いまま育った幼児状態だ。ただ母船コーラル・プリンセスが大体どの方角に停泊しているかを、山勘で覚えておき、その方角だけは常に気にしながら見知らぬ場所を歩いている状態だった。

だから香港の町の今どこにいるか勝手に推測するしかなかった。というのも主催者手配のチャーターバスで二日目も又々、馬鹿でかい置物ばかりある無用の土産物屋に連れて行かれ、そこに何十分も放り出され、予定発車時間を待つことに飽き飽きした末、堪忍袋の緒が切れてしまい、とうとうこれ切りで上陸研修と称する強制買物ツアーから解放してもらおう決心をしたのだ。チーム全員で責任をもち、言い渡された門限以前に船へ戻ればいい。其処（場所は不明）で降りたのは我がD8班だけだった。

後で聞けば、幾つか他の班も別の土産物店でバスの強制買物ツアーから逃げ出している。何せバスに乗り込んできた日本語ペラペラの香港人ガイド氏は、金の有り難さをずっと喋りっぱなしだ。この香港では水を飲むみたいに日常的にナンバーズ賭博やその他のひよんな出来事にひっかける賭け事、つまり博打一本で大金持ちになった人の成功物語しかガイド氏は言わない。何だか香港市民が成金の金字塔だらけに思えてきた。

精力的なガイド氏は飽くまで香港の庶民が、ずいぶん明け透けに大金持ちに成りたがっている亡者である事実を次々に例を挙げて表明する。彼自身曰く、金と富こそ尊敬すべき全てです、他にこの世界に目指すべき何が一体あるというのよ。香港では車で人を轢き殺しても日本円で七十万円ほどのお金で片が付くのよ、と。ここに交通刑務所はないのか？ と誰かが問えば、香港は狭くてそんな無駄たくさん持っていられないね。それよりね、もっと現実が重要よ、888と続く車の福運ナンバーは何百万円もするよ、人の命より高いのよ、ほら皆さんよく覚えておいてください、人生で何が一番大切なのか。

ほら窓の外見てください、輸出台数世界一というけど日本車ほとんど走っていないでしょ。不思議ですか、香港はドイツ車多いです。高級ホテルの前、見なさい全部ドイツ車です。ね、そうだったでしょ。これステータスよ分かる？ 教えましょうか、香港では日本車乗っていたら金持ちじゃない証拠、生きていても誰も尊敬してくれないのよ、生き甲斐無いね、とガイド氏は香港的人生論を吹きまくるのだった。

日本人だって正直言えば金にしか興味のない国民だ。しかし嘘でも皆が同じ程度に物を持っていて、うっかり他人から尊敬されたくもなく、中流生活に甘んじるべきという人生哲学で育った我々の耳にやがて、香港人ガイド氏の絶え間ない辻説法によりオデキみたいな腫れが生じてくる。あまりに金権偏重の表明を聞くのは神経が疲れてしまう。金亡者氏のガイド氏率いるチャーターバスから逃げ出したい。幸いこのバスは洋上にポツンと浮いている訳じゃないとやっと気付くのだった。

脱出は香港上陸二日目の昼のことで、船の揺れに慣れた足許は陸酔いで前日より目がクラクラしていた。さて歩き出したが早速D8班八名の上陸活動費である供出金八万円を、どこかで香港ドルに両替しなければならぬ。昨日の初日は全くそのチャンスが無かったのだ。

個人単位で少額を香港のコインに替えただけだった。

何故なら下船前、香港の観光地ではトイレットに行くのと其処に番人がいてチップを取られると説明されたからだ。日本では考えられないが、百万ドルの夜景を俯瞰するビクトリアパークの公衆トイレにも小母さんがちゃんと番人で居てチップを取るのは本当だった。そのことを少し詳しく言うと、ここ香港では、我が日本国発行の百円玉や穴の開いた五十円玉は素性が知られており、トイレのチップ使用にもOKだが、十円銅貨ではフンと蔑みの首を振られてしまうのだった。こういう雑学も学校教育で子供の時分から教えておかないと国際社会で生きぬく知恵が付かないのじゃないかな？ 香港の小銭からトイレのチップレートを逆換算すると日本円では十円位のものだから、わが国の百円や五十円玉でいちいち小便をするのはもったいないから、常時どうしても香港ドルの小銭が要る由縁である。

だが今日の換金願望は使う目的が違う。ゆうべ船室で誰かが言い出したのだ。

「明日で香港ともお別れなんだから一つパーッと豪勢に行こうじゃないの、本場のヤムチャというのへ行ってみようよ、それも日本円や米ドルやビザ(VISA)カードが通じる表通りじゃなくて、日本語は全く駄目というような裏通りの地元っぽい所へどう？」

「おっ、それは好い、でも自分達だけで行けるかな？」

でも酔っていたから皆で是非行ってみようという結論になったのだ。ここで何がそれは好い、のかというと、一切何の予備知識も無い所へ行ってみたいからだ。何もかも様子の分かっている均一国日本に何十年も生きてきたので見知らぬ恐ろしさと遭遇すると云う事がよく分かっていない難は確かにあるが、でも集団八名で行けば恐くない訳だ。

香港ではそれまで、例えば専用バスから降ろされて免税店（デューティ・フリーと聞いただけでやがて入るのが嫌になってくる店）で、いち早く猛烈な売り子娘が寄って来て、カタコトの日本語でヤスイヨ、ヤスイヨと言われ、日本製電卓に数字を弾いて見せられる。そして、色良い返事をするまで徹頭徹尾しつこく付き纏まとわれた。店員から、ワタシの判断で三割引キマデグイチョブヨ等と説得され続け、首を何回か横に振ったくらいの生易しきでは絶対に手許から離してもらえないのだった。こういう凶々しい商売熱心な売り子からも逃げ出したいという弱気心が根底にあったのではないだろうか。

免税店での例をもう一つ。D8班のメンバーの一人が見た話だが、彼はたまたまで売り子の電卓の単三電池が切れたので手持ちのナショナルを二本あげた。新品のアルカリ電池だ。そして売り子の切れた電池を見せてもらったところメーカー名も電圧表示も何もない中国製で、古びた赤いウィンナーソーセージみたいだったという。どうやら免税店ではそれを再充電して使っているらしい。この辺は日本人も彼らの逞しい生活力に学ばねば。

香港二日目に話をもどす。さあ、まず日本円を両替できる銀行を探して表通りを歩いた。探し歩く間、当然、香港の街の様子が専用バスの車窓よりもゆっくりした速さで詳しく目に入ってきた。やがて今どの辺りにいるのかもおぼろげながら判ってくる。

時刻は昼過ぎだった。何かの小店に小母ちゃんがいた。店番をしながら丼の一膳飯に豚足の一片をのせ掻き込んでいる。我々に正面から見られても一向平気で赤い長い箸を動かし、豚足メシを美味しそうに食べている。日本人の使う箸よりかなり長いのが特徴で、彼女は食べられるアタシは幸せさ、隠れることなんか無いさとも言っている顔付きだった。

街中の通りに並木などの樹木が極めて少ない。日陰を無駄と考えているのだろうか、それとも我々が歩いた通りだけ木が少なかったのか。日本人はたまに海の外へ出ると片隅の小さなことを見て好く確かめもせず日本全体と比べるミスを犯すと言われる。しかしそれは日本を恋しがる気持ちが目を開くからではあるまいか。日本恋しや、である。

しかし香港の街中の道路を見よ。何と、走っている車のバックミラーは皆どれも運転席側にしか付いていない。これは全く見えたとおりで絶対に間違いは無い。偶然に片側だけ全車

のバックミラーが落ちてしまった訳は有り得ない。きっと運転席から反対側を見る必要など無く、不注意者は轢き殺してもいいのだろう、此処の常識では。

そして更に驚く。地元の歩行者は寸暇を惜しみ、交通量の激しい通りでも信号の無い所を好んで渡っている。又、交差点が赤信号であっても歩行者は平気でどんどん渡る。それを見ても車は速度を落とさず平気で突っかけてくる。やるかやられるか、お互いが真剣勝負なのだ。きっと轢かれるような真似をする側が悪い、轢かれても情状酌量の余地なし、それが常識として香港の町なかで通用している。ここは、だから成熟した大人の社会だともいえる。

通り沿いの本屋らしい店を覗いてみた。日本のように歩道に食み出す堂々とした差し立て売りのラックは無い。表に出しておけばたちまち通行人に盗られる。それが当然という常識的背景が有るのだ。全ての本・雑誌は扉を押して店内に入って行かないと駄目だ。又、店内は日本のように本が洪水並には置いてない。中は書肆と古臭く呼びたくなるほど整然としており、流行のBGMなど流しては、ひっそり静かで、ここが本屋であると再確認できるまで少々時間が要る。しかし確かに本屋だと分かる落ち着きがあった。

さて、いよいよ両替商の看板を出している中華銀行の前に来た。只、入り口の横には剥き出しのライフル銃を腋の下に構えた警察官、いや、もしかしたら私設のガードマンが警護に立っていた。彼がもしガードマンだとしたら香港では警察官以外が銃を持っているし、事が有ればいつでも撃つつもりらしい。本物の防弾チョッキを着けているし、銃の構え方からしてライフルの弾倉に実弾が入っているのは間違いない。たぶん、ここ香港ではピストル以上の威力ある銃器でもって銀行を襲いに来る奴らがいる証拠だ。又は過去にその手の強奪事件があって、やられる側が悪いという街の論理でガードしているに違いない。我々八名はライフルマンの脇から銀行の中に入って、狭い鉄柵付きの、何だか日本の馬券売り場みたいに小さな両替窓口の前へ行き、日本円を香港ドルに替えてもらおうと試みた。

本日の為替円レートが幾らで、当銀行の両替率が如何ほどか、なんていう数字が壁に掛けているけど我々は面倒だから気にしない。そんな比較に日頃から慣れていないし、今はただ本当に我が日本国の一万円札が異国の市中銀行で通じるか否かが最大の関心事なのだ。

事前研修で聞いた限り、香港の街の表通りでは日本円が通じると説明を受けている。我々はパスポートが無いと入出国は不可なのに、お札は世界を自由に行き来しているらしい。でも心配で恐る恐る鉄柵の窓口に差し出してみたら八枚の日本国最高額紙幣は一瞬で窓口係の手に移り素早く数えられた。偽札かどうかをチェックする様子もない。どうもOKらしい。お金ってそんなに正体がしっかりしているものなのだろうか。

パスポートを見せろとも言われない。申請書類を書いて此処に名前をサインしろとも言われない。出発前、日本の地方銀行でVISAのトラベラーズチェックを米ドルで申し込んだ時は慣れない書類記入にかなり手間が掛かった。ここではパチンコの景品交換所並にスラスタと事が運ぶ、こんなに簡単なことで良いのだろうかと思案になる。

しかし、八万円分がすぐに換算され出てきた香港ドルの札束の多さはどうだ。D8班の全員が目を見張る。我が国の一万円君がここで、やったァという感じ。ギュッと手で押しつけても札束の厚みが優に二センチ以上はある。でもよく見ると、いや全然見なくてもだが今貰った紙幣は、この口が曲がっても絶対にお札だとは言えないような手垢付きでしかも印刷薄れの汚い物ばかり。これが本当に香港市中で通じるのだろうか。過去、日本のお札でこんな酷い目に会っているのは一枚も見たことが無い。日本の銀行ではよく手の切れそうなピン札が出てくるが、ここでは全く逆だった、銀行の窓口からクシャクシャの屑紙みたいなのが出てきたのだ。

それに、同じ額の数字の並んだお札が幾種類かあった。数字は同じだが絵柄のデザインが違うのである。同額紙幣の複数存在なんてちょっと信じがたい。しかし現に手に載っている。

もし日本で柄違いの千円札が三種類あったら相当不都合な結果になる筈だ。あ、だからこの土地は蒸し暑いけど清涼飲料水の自販機の設置、先ず無理だろうなと想像が付く。仮にピン札ばかり流通させても紙幣鑑別機が面倒になるはずだ。そういえば煙草の自販機も香港市中に一切見かけない。D8班メンバーで煙草を吸う人は今も煙草屋を捜しながら歩いてきたのだ。後で判ったが香港ではお札を、別々の市中銀行が刷って発行しているのだそうだ。うっかり洗濯しても縮まない、折り畳んでも簡単には皺にならない我が日本国の紙幣とは全く様子が違う。変なところで日本のお札に愛着を感じる結果になった。大きな声では言えないが緑色の米ドル札、あれだってオモチャ並みにすぐボロになり、あの紙屑はヒデエもんだ。

で、我々の手に鎮座した香港ドル札には何とも威厳が無かった。此処の市民が尻でも拭いて徹底的に汚して使っているのかしらと思わせた。それにしても厚みだけは本当に札束の感じになって増えたものだからチグハグな感じで、我々の中からこれが大事なお金であると云う日常的な節約感覚が一挙に消え去った。こんなに汚い札、旅のお土産にもならない。えーい、ここにいる間に全部使っちゃえ、となったのである。

山勘で探し探し歩いた末、D8班はついに七、八階建て大酒樓の一店の前に立った。城塞みたい豪華で堅牢なビルディング、上から下まで各階がヤムチャその他の料理を出しているらしい店だ。めでたい赤色が好きな民族だから何とか大酒樓という名の入ったドでかい看板も派手だ。うっかりすると外観はホテルと見間違えそうだが、香港の大通りから少し裏手に回ると、こういう建物が矢鱈あちこちにある。我々がここに入ってみようと決めた酒樓は、客の昇降は二基の専用エレベーターのみだった。階段が見当たらない。

ヤムチャの階を目当てに四階で降りてみた。周りの香港市民を真似てエレベーターホールから食堂の入り口の方へ進む。するとその先に、いやこれはもの凄い眺めが現れた。この場所だけでも五百人以上は詰めかけたと思われる地元客が、だだっ広い奥行きの大広間に二、三百もある各テーブルに付いている。その大広間の入り口できょろきょろ見回していたら、船と同じようなボーイ着の中華系氏が目敏く近寄ってきた。もうこっちは船上でその物腰に馴れている。が、このボーイ氏は生真面目な顔付きでやや緊張しているみたいで彼から何か広東語で問われる。むろん、広東語らしい彼のコトバは一言も分からない。

「リー・デイ・ゲイトゥ・チン？（これは幾らですか）」を下船前に教わって、さっき果物屋の店先で喋ってみるとちゃんと通じて嬉しかったが、さて、相手の喋った答えが全く判らない状態だ。しかし必死になれば意思は通じるものなのだ。

ヤム茶樓のボーイ氏に向け両手で、我々は八名であると指を八本立ててみせた。彼はその信号がすぐ分かったらしいが、ちょっと厄介だなと言いたげな表情をした。でもさすがに中国人で再度こちらの人数を目顔で数え直し、合点と一つ飲み込むように頷き、ではこちらへいらっしゃいと通路へ案内する身振りを示した。それが躊躇も気負いも無く、すごく自然体だった。こういうのを自然なサービス感覚と云うべきではなからうか。

ボーイ氏の背中に付いて行く途中、辺りは、いやはや林立する如く数あるどの丸テーブルも家族連れや友人連れが埋め合っている。注意して見回しても外国人客は一組もいなかった。いや、ここでは我々はその外国人であることに気づく。案内先は、点心のワゴンが通れるだけのスペースを取って配置してある小さな丸テーブル群の一つに導いて行くのかと思っていた。だが、ボーイ氏はどんどん大広間の奥へ進んで行き、大広間の中央にデンと有って他よりも一段高い貴賓席か王座のような四角い台上の舞台席へと案内されたのだ。

つまりスペシャルゲスト席とでも云うか、舞台四方のうち一つの側に垂れ幕が有るだけで開放的、下々の人々の味わっているヤムチャ風景をぐるりと見渡せる上位置なのだった。だから当然のこと、点心を食べている最中の人々からもこちらの様子を見上げられるのだ。照れ臭くて再度見回したら、向こうの大衆はこちらの登場を見て邪気なくニコニコ笑っている

顔が多かった。我々を小馬鹿にしている風でなく、舞台席に上がった彼らはお大尽だね、と羨んでくれている感じ。その注目度が満更でもなく、香港のステータス願望の一環が少し分かった気がした。

我々は決して金持ちじゃないのだが、この散財のチャンスに賭ける不退転の決意か何かが付いて取り合えずボーイ氏の眼鏡にとまり、最高級の此の席が与えられたらいい。今更、ここは厭だと言って退くこともできまいから至って鷹揚に構え、舞台席に留まることにした。何せこの懐中には、押し潰しても厚さ二センチ以上の香港ドルを携えている。これは日本円にレート換算するとおおよそ四十万円以上の価値があるはずで、つまり一人頭五万円以上の飲食が可だ。一般相場はしかと判らぬながら、現在は何でも来い香港のモノ何でも来い、の強気だった。一つには、席へ着くまでの間に我々は、町の人々が各テーブルに取ったヤムチャ皿を素早く眺め回した結果、意外にもおおよそ各ヤムチャの値段はそう高くなさそうだと推測できた。見るからに大衆的な感じの料理ばかりであった。高い舞台席から気後れもせずに周りを見渡す余裕が多少あるのはその為だった。

広大な建物内は殿堂のごとく立派だし、ヤムチャ皿に盛られる様々な点心（おかず）も凄く旨そうだが、食べている香港人達はどうも普段着の小母さん、姐さん、小父さん然とした姿なのだ。絶対に金権ガイド氏の言う成金亡者などではない。彼の宗派である金至上主義の亡者達にも見えない。中流でしなやか、我々の同族だと直感できた。

さっきのボーイ氏が又すぐやって来て手際よくテーブル上を必要な用立てに整えてくれた。狭い見聞の限り、こういう技が素早く出来るのは日本人と中国系の人だけだ。この段階で、我が国でなら要らないが香港ではもうチップをやるのか否か、それが判らないから一応身構えて相手の為すがままに任せる。もしチップが欲しければ、船上で経験した通り相手は遠慮せずに「オ金出シタホウガ好イノヨ」のシグナルを何気なく送ってくるはず。しかし、どうやらこのボーイ氏に現在そのような気配は無かった。

彼から大きなメニューリストを受け取った。当たり前だが店主挨拶欄も数ある料理品目も全て漢字で、英語もカタカナも一切無し。日本では全く使われない多数画で読み難い漢字もたくさんある。それでも字面でもって食素材や調理法のおよその見当がつくから漢字の利便性はすごい。香港の人達のご先祖が創ってくれた多くの漢字を今でも沢山覚えるのだろう。漢字使用に徹したメニューを見ると、やはり我々日本人は昔からよその国のものを輸入し、やがて使いやすく崩し直して共有する加工民族なのだなどと改めて思った。

メニューリストで料理を選んでいる内に、早速お代わり自由らしい中国茶が陶器製の大きな急須で出てきた。香港の人々のテーブルをよく見回すと、店のお茶の風味は何種類か揃えて有るらしい。客それぞれが好きな茶を無料で取れるし、空いたら何度でも急須ごと替えてくれるのだ。お客がそうやって茶に親しむ満足感が、見るうちに察しられる。

又、メニューからボーイ氏へ注文する料理以外に、何かちょっとした点心が欲しければ、周りの客のやる真似をすればいいとも判った。つまり厨房から此の場内へと次々に熱々の物（点心）の入ったワゴンが押し出てくるのを、各自が手を挙げ呼び止めればいいらしい。客がちょっと指さすだけで、売り子がセイロ蒸しでも何でもすぐ差し出してくれる。お代は皿数で分かり、すべて帰り際にレジで一括精算する仕組みだ。点心皿上の料理はどうやら一、二種類の値に統一されているらしい。たまたま良い人に当たったのかこの優秀なボーイ氏の広東語で説明する喋りながらの身振りで、何となくそうだろうと推し量れた。

ワゴンの点心売りは、まあ後からでも追々呼びとめる事にして我々は先ずメニュー表から漢字の並び方を見、これは焼いたか蒸したか、揚げたか炒めたかの見当をつけ、更に、魚か、鶏か、豚か、蝦か、野菜か、それも判らなければ海か山かを想像し、ボーイ氏へ料理品目の一つずつを指で示し、どれも三から四人前宛てで頼んだ。例えば、海鮮蝦を蟹と鶏卵入りの

スープで野菜と一緒に煮たものだろう、とか想像しながらだ。

すると此のボーイ氏が機敏に応じ、「皆さん、他にも料理を頼んだことだし、これは四人前も取ると量が有りすぎる、絶対に食べ切れないから二人前にしておきなさい」と言うらしき身ぶりで教えてくれるのだ。すべからく言葉はカタコトも通じていないのである。だがお客さん、あまり料理を取りすぎるなど言ってくれる親切な配慮が不思議と判るのだった。

「それにしても、字だけは少し読めるらしいが変な組み合わせで料理を頼むものだな、あんた達は」とも内々は言いたげなボーイ氏の顔つきだ。彼は料理選択まで導くようなお節介はしないが、紛れ込んだ我々を何処の何者と思っているのだろう。香港の本家である中国は大昔から多民族国家だ。遙か西域の紅毛碧眼系もその国民に居るのだから、ましてモンゴロイド系で髪や顔立ちの似ている我々を同胞の一種ぐらいに思っているのか、見下すような隙を見せぬ対応ぶりである。

また恐らく当店へ日本人が何か食べに来た前例の無いらしい事が、この後すぐに分かる。

ざっと目に付いた品名をボーイ氏に伝え終えたので我々は一応ほっとして、では乾杯用の飲み物、とりあえずビールを頂きだという日本のヤキトリ屋的発想で、冷えたビールがいいね、随分歩いたんで喉が渴いたなァと頷き合い、脇に控えているボーイ氏へ、

「ビールちょうだい」と気軽に頼んだ。

ところが意外や、これがまるで通じなかったのだ。つい今まで身ぶりだけで高度な注文用会話が共有出来ていたボーイ氏なのに、我々が何度ゆっくり「ビール」と言い直しても不審げな顔つきをするのだった。日本式発音が悪いのかと思い、ビアと巻き舌を喉奥へ引っ込める英語式のR音に直しても尚まるで不通である。ならば、と早速メモ用紙を取り出してBeerとスペルを記入しボーイ氏に見せたが此れもやはり駄目。英語はまるきり知らないらしい。

ならば、お互いは漢字同士の国だから「麦酒」と書いてみせた。ところが此れも我々側の先祖が最近勝手に創った和製コトバだったらしく伝達不可なのだ。そこで当店の漢字だらけのメニューリストをあちこち引っくり返してみたが、どうやら酒類に関する記載が一切無い。その時、まさかこの香港では昼間はアルコール禁止の行政条例があるのではという不安感が我々の見交わす目に浮かんだ。このボーイ氏は我々へ遠回しに、昼酒は駄目よ、と断っているのかも知れない。と言うのも、ざっと周りにひしめいている一段低い席のどこを見渡しても、空のビール瓶が立っているテーブルは一つとして無いのだ。それこそ地元の皆さんはジャスミン等の香りがする薄い色付きの中国茶でもって、ゆっくりお喋りをしながら昼の点心のひと時を楽しんでいらっしゃる方ばかり。飲酒で真昼間から柿色に赤く染まっている顔などは無かった。

で、ひとまずボーイ氏を解放してやり、料理の注文に行ってもらった。でも我々はどうしても冷たいビールの泡立ちでもって湿気の高い香港の暑気を喉からグビグビッと追い払いたい思いが諦めきれないのだった。だから、あの優秀なボーイ氏が再び厨房口から大広間に出てくるのを待った。おっ、彼が出て来たぞと騒いで、掌を下にして手首から先をオイデオイデと扇ぎ、日本式の「おーいボーイさん、ちょっとこちらへ頼みます」のサインを派手に無言で送った。何せコトバが一切通じないから何も言わぬほうが好い。

と、何とも不思議なことに、優秀なボーイ氏はちゃんとこちらを見たのに、どうしたことか此のクイックの手つきに対して何だか我々を避けるみたいにやや後しさるのだった。顔も何だか急にこちらを恐れるような強張った表情なので妙なボーイ氏だ。確かにその目をこちらへ当てているのに、まごついたように近付いて来ないのだ。

その内、この舞台上に料理が運ばれて来るよりも前に小学二、三年生くらいの男の子が一人不意に我々のそばに現れた。何だか店の小僧然としたその改まった様子は、学校から帰っ

てきたばかりの所を、おい好い子だな、あの中央テーブルへ行って訳の分からないことを言っている奴等の注文を聞いてきてくれと言いつけられたらしい感じであった。

この小さい男の子は、我々にも分かる中国語的な発音の基礎英語を喋った。
「アナナ達、他二何ヲ欲スルヤ？」

小学校で習っているのだろうか、子供はすぐに我々が冷えたビールを六本欲しいと言って
いることを英語で理解した。教育効果は素晴らしいと思った。テーブルの間を普通の足取り
で戻った男の子の背中がさっきのボーイ氏に何か話した。すぐにボーイ氏の頷くのが見えた。
次に、ラベルに漢字名の付いた緑色瓶の冷えたビールがすぐに出てきた。青島（チンタオ）
と読めたが味覚がどうのこうのと言わない方が良い感じ。香港に真っ昼間からビールを飲ん
ではいけないという条例の無い事だけは判った。又、伝統ある馥郁たるヤムチャの前にビー
ルで腹を膨らすようなアホも居ないのだと、それは自信を持って言える。

乾杯し寛いだ段階で、ヤムチャに集まっている大勢の人波を改めて見る。というより一箇
所に集まったこれだけ沢山の中国人を初めて見たのだった。顔立ちや雰囲気はどこかがほん
の少しか我々日本人と違うようだけれど、その大元は各々の習慣によって生じる顔の筋肉
の動かしかたや、日常動作の些細な相違から出るものだろう。さっき道端の店で見た豚足の
一膳飯を掻き込む小母さんもそうだったが、此处でも堂々と顔を飯椀に突っ込んでいる。こ
この人達は文字通り物を夢中で食べる姿を誰に見られても恥ずかしがらない。

むしろ食べて美味しければそれを顔中の筋肉を使って豊かに表現する。そういう風に顔面
筋が自然に動く。例えば、私の斜め正面に見下ろせる近くの席で若い女性が、点心皿の小さ
なシューマイを一つ口に含んだところだった。すると彼女の鼻奥に口中からそのシューマイ
の温かい薫りが広がり入ったのだろう。その薫りに引き付けられたかのように両方の黒目が
一旦顔の真ん中へ寄って、しばし留まった。寄り目になったまま料理の薫りを楽しんでいる
のだ。やがて、左右の目玉がゆっくり鼻を離れつつ時計の針みたいに右へクルリと一回転し
た。彼女の顔は私の方に向いていたが、目はその表情からシューマイの世界に遊んでいるの
だった。シューマイの旨さに酔った目が宙をうっとり漂うと表現するしかない。そこへ薫り
の好い中国のお茶を一口、後味を消すために流し込み、お茶とシューマイとの馥郁たるハ
ーモニーを楽しむことになる。

何でも無いことのようにだが、私はこんな感動的な人間の表情を見た覚えがない。「効き目」
というコトバの発生元をじかに目撃した気がした。人間の食べ物とは、即ち火熱の通された
料理とは一口ずつがこんな具合に賞味されて然るべきものなのだろう。それに、喫茶という
コトバも中国人の日常習慣から生まれたのだ、と実感できた。

数ある各テーブルでは実に大量のお茶をポットごとお代わりし、ポット配達係の姐さん達
もちっとも嫌がらない。生まれつきのように当然の習慣なのだろう。

その次々に飲むお茶に合う少量の点心を添えるために押して来るワゴンが常に大広間の中
を何台も通り、料理出来立てホヤホヤの状態で回って来る。ここの香港市民は、これだけで
もう充分リッチではないか。もし仮に日本がイギリスに植民地化された後、百年経った時に
こういうヤムチャ・システムを自分達だけで維持していられるだろうか、怪しいと思う。事
ほどきように骨太で且つ深い食文化圏なのだ、此处は。

メニュー表から注文した料理の数々も頬つぺたが落ちるほど美味かったが、大広間を姐さ
ん達が押してくるワゴンを呼び止めて試しに指さし、蓋を取ってもらった。例によって中国
語で教えてくれる点心（おかず）の名前は判らない。発音の中に微かな子音が多すぎて我々
の母音慣れした耳には聞き取れないのだ。何度か聞き直してその発音をオウム返しに真似し
ても駄目。でも、嫣然たる若い姐さんの発音する中国語のイントネーションが美しいぐら
いの事は分かる。西方のイスラム文化圏から何千頭という駱駝を繋いだ隊商が長安まで交易に

やって来ていた昔、胡妃（碧眼のイラン女性）等がこういう点心を商っている酒店が唐代には既にあったのだろう。李白の詠んだ詩『金陵酒肆留別』にそんな場面が出てくる。

風は柳花を吹いて香は店に満ち
呉姫は酒客の勧める酒にも飽く
金陵の子弟来たって相別れむとし
行く者と送る者と各々酒杯を重ねる
君に請うて試みに問う東流水を
この別離は誰により長い短いか

姐さんが押して来る小さな四輪付きのワゴンには例えば或る一台の場合、正確なプレス絞りとは言えないアルミのボール（蓋）が一つ一つの小皿に逆さまに被せてある。試しに身ぶりで其れ一つ頼むと、彼女がアルミ蓋を取って中身を見せ、当方がウムと頷けば、下の点心皿だけを目の前に置いてくれる。其の小皿の上で湯気を立てている黒っぽい茶色の物は、たぶん豚のモツを何かの野菜と一緒に柔らかかに煮てあった。当然のこと我々はこれを簡単にモツ煮と呼んだ。

そのモツ煮だが、溜め息をつかせる程の味わいと舌触りの柔らかさはどうやって煮たのか言い当てようも無いほどに深い。そもそも豚モツが歯も要らないほど柔らかくなりながら元の形を整えている、そんな具合にする為はどう料ったのか人間の才覚は不思議な気がする。

そうかと思うとギョーザに見して似ているがギョーザでない物が通りかかる。呼び止めて此れもテーブルに頂く。食べてみると包皮も中に入っている具も、我々が普通に日本で知っている風な脂の滲みだニク臭いギョーザ味じゃない。でも、こっちの方がずっとスマートな触感で舌先に^{とろ}ける美味。

試しに一人の姐さんに、これらは一皿如何程のものなのか香港ドルの紙幣を何種類か見せてみた。彼女は紙幣を指で弾くような仕草をし、何か答えて笑った。どうも紙幣が要るほどの値段ではないらしい。それで英国女王の肖像が浮き出ている香港のコインを幾つか彼女に見せたら、その中の一枚を指さした。どうもその小銭の持つ貫禄からして、日本人の目で言うと五十円まで行かない位の感じだった。点心の一皿がこれか、それは安いッ！という事になる。

こうなると注文に便利なワゴンを矢鱈に呼び止めだす。半透明の乳めいたスープでキクラゲを煮たもの。中の具(蝦)が見える皮の透けたシューマイ。蟹の肉と何かの粉を練ったと思われるメンチ・ボール甘辛煮。葱らしき物を添えた鶏のレバー煮。鶏皮の甘辛煮。アサリの時雨煮風のやや味が濃くて鷹の爪入りのもの。豚のどこかの皮で包んでカリカリに揚げた肉饅頭。固めの豆腐のような物に何か酒粕と混ぜたチーズみみたいな餡が掛かっている物等々。でも、まだ呼び止めていないワゴンが大広間を右行左行しているのだった。

今の日本語には、これらの料理を形容するだけの漢字が既に使われていない、と判る。だって我々にはどうにも書きようがないのだ。日本政府は、国語教科書を検定許可する省のお役人を、もっと香港のヤムチャ店へ出張させたほうが良いかもしれない。まして、役所の出生届け窓口で子供の名前の漢字を制限したりなどせず、親が子供の将来に向けて稔り豊かにこうなって欲しいと願う心を文字に表わせるようにしたほうが好いはず。

三時間後、顔がほくほく赤らみ身の内から汗ばんで腹一杯になったD8班の皆は、椅子から足を投げ出し息苦しくて顔から腹から天井を向いていた。三時間も次々に食べ続けたことなんて今の今まで記憶にない。再び望んだとしても一生の内に多分一回位しかできないであろう類のことを一つたった今、香港でやつけたのだ。

ヤムチャ楼を出た時の勘定は、多分そう高くはなかったと思う。香港ドルの札束ごと渡したらあのボーイ氏が其の中から数えて値段の分を取り、まだ分厚い残りを返してくれた。その残りの中から札をつまんで彼にチップを上げた。急に輝いた彼の顔付きからしてかなり多額のチップであったらしい。コトバも判らず紙幣の価値も知らず、目敏い香港人に騙されなかったかどうか知らぬがそれはそれ騙される方が悪いという此処香港のルールに従ったままだ。

第七章 コーラルバー

研修船では洋上航海の間に一度か二度、ブロック別コンパという催物がある。これは第一章に記した船長主催のパーティーの様なもので、八人単位のグループが集まって編成されているA～Hの八つのブロック別に、いわば講師に感謝する意味で懇親の宴を開くもの。その場の酒、つまみ等の費用は予め渡航費の中に含まれていたと記憶する。

それでも、コンパの席上で酒や料理を運んだりするボーイ達裏方さんへのチップとして、あらかじめ各人が千円ずつ日本円を出してブロック単位で纏めておき、当日にボーイ頭に差し上げるのが慣例として有った。どうやって向こうで分けるのかは知らないが、コンパの始まる前に皆の前で正々堂々とボーイ頭が贈呈式みたいにお金を受け取る。それから彼が一声号令をかけると、後ろに控えている下級ボーイ達がきりきりと動き始め、各グループ別に座ったテーブルへと飲み物を運んでくれる。この時は通常の食事時よりボーイ達の物腰は規律正しく見えた。

我々Dブロック（全体で八十人ほど）がコンパ会場の大食堂に集合した時、開始直前に説明好きらしいこの研修の主催者代表から日本語で注意事項が放送されている。彼いわく、ボーイ達はいまその仕事の最中であり船内の規則として、幾らこちらから彼らに親近感を覚えてもビールやお酒を勧めたり、又は強要したりして飲ませてはならない。規則を破ると彼ら自身が罰則を受けることになるから、その辺は弁えて徹底するように、とのこと。

最初は我がD8班もきちんと言いつけを守っていた。でも日本人は一杯入れれば杓子定規に自制していられなくなり、規則と言ったって法律じゃなし船内規則程度ならまあ多少は弛んでも好いんじゃないの、よく働くボーイさん達だしビールの一杯も差し上げ慰めてあげたい、ナアナア、マアママという例の癖が出始める。世界の一等国民はそういう点で厳しく、下賤なボーイ達との間に壁を作り上げて無視し、孤高潔癖であると伝え聞く。

我々はむろん三等国出身だからそうは行かないのだ。船に乗って何日か経ているから、非番時のボーイさん達が彼らの下層居住区から廊下に食み出てガラガラと音高く掻き回す麻雀好きだと知っている。彼らは博打好きというより雀キチと呼んでもいい。

緑のフェルト敷き雀卓を囲み、何やら卑俗にワイワイ言いながら、日本の物の一倍半ほどもある大きな雀牌を打つ彼らの遊びを見ただけでも親近感を覚える日本人だ。我々がする同じ系統の遊び道具で一時寛ぐ彼らに、こちらから笑むなど言う方が土台無理だ。麻雀中の彼らもこっちの笑みには、人種の壁を越えニツタリと目顔を返すことがある。

それから他にも親近を感じることもある。彼らの摂る遅い昼食は一采のみ載った一膳飯で、ボーイ服姿のままギャングウェーの舷に寄りかかり食っている時がある。我々はエアコンの利いた涼しい研修室から、そんなボーイ達の背中を眺めることがある。彼らは丼飯を素早く掻きこみ終えるや骨などの残飯を箸先でクルクル掻き回すようにしてボーイと船端から海へはたく。毎度当然のような処分で、恐らく下にはそれを待っている魚や海鳥がいるかも知れない。その罪のない捨て方がいじらしいと感じられるのだ。

ボーイ達は決して若いわけではない。私と同年代以上の者も多くいる。世間智では我々よ

りもずっと肥えているはずだ。でも不思議なことに彼ら同士は朝の給仕時から大声で罵り合いの口喧嘩をしている。たぶん理屈らしい台詞を互いに猛烈に投げつけ合いながら、その一方で、我々に対してはリングかオレンジか尋ね生ジュースを注いでくれたりするのだ。

そんな中国人ボーイの中で、歳を食った割に下っ端らしい者同士がお互いを目の敵にして一向に口論の止まぬペアが何組かいる。人前で又そのペアの罵り合いが始まると他のボーイ達も横目で楽しそうに眺める。この割切り方がさばさばしており、日本的の湿润とやや違う。

ボーイ同士の口論は別々に仕事をしながら大声でお互いをやり込めようとして身振り入りで展開される。日本人のようにカーッと口籠るのでなく、どんな悪口雑言もすらすら出てくるのは言語的に中国語が堅固な構造を持っているのかも知れない。もっとも罵り合っている其の内容が判らない。だが言っている内容は、その表情からすると、

「バーカ、バーカ、お前のかあちゃん大デベソ、とうちゃんなんかオタンチン。お前の仕事なんかオレに言わせりゃ屁の河童、次の上陸でカサカキ犬に食われて死んじまえ」位のことも知れないが、でも連綿と続く罵倒語彙はずいぶん豊富そうだった。

そんな中年ボーイの一人がコンパの最中に我がD8班の居る席周辺に何度か水割りウィスキーを運んできた。我が班はやがて彼をテーブルの奥へ手招きし、こちらから笑む目顔で迎えた。我がD8メンバーの陣取るテーブルは会場の角隅だ。彼に水割りを勧める素振りをしたら、彼はイヤイヤと首を振った。その否定の仕方だがどうも勤務中だからダメと断っているのではなくウィスキーは嫌いだと言っている気がした。

「一杯どうです？ 顔に汗かいているし、おたくはいける方の口でしょ」

改めて日本語で親しく話しかけながら新しいコップに冷たいビールを注いでみせた。彼は直立していたが、一瞬にしてその目がこのコーナー奥から会場の遠くをさまよった。彼のコトバが判らないでも、それは内心の誘惑に抗しがたい時の人間の顔付きだった。この中年ボーイ氏は我々と一脈話が通じそうだ。いま彼は、広い会場のあちこちに散らばっている同僚ボーイやボーイ頭が、現在こちらを注視していないか反射的に探ったものらしい。彼の喉がごくりと上下に動いて唾を飲み込んだのが判った。

我々の方でも彼の規則違反を見つけられたくないからテーブルの奥へ招いたのだ。確かこのボーイ氏は我々がカリフォルニアオレンジの実を絞った純生の逸品よりも、濃縮還元したものらしきリングジュースをガブ飲みするのを面白がり、D8班の居る朝食テーブルにリング果汁一ポット分を有難く置いていってくれたことがあった。彼は忘れたかも知れないが我々は彼を見忘れてはいない。こんな形で好かったら彼にお返しもしてあげたい。

大して躊躇せず彼がテーブルの陰に屈んだ。嬉しげなその顔の輝きにやや不安な目付きを残しながらも受け取ったコップのビールをゴクゴクと一息に旨そうに飲み干す。この飲みっ振りは相当なものだ。彼は空のコップからD8班の者へ目を上げ、

「ひえーっ、今のでやっとう心地がつかれましたぜ」とでも言っているような可愛い顔付きで微かに照れた。当然こっちは冷えたビールを新しく注ぎ足してあげる。

日本人より顔の筋肉を固くしないこの中国人のように元々は我々も斯くの如き豊かな表情が出来たに違いないと思われる、其の顔の筋肉の活発は若し映画に撮ったら物柔らかで深みある好いシーンが得られると思われる。他のボーイを見ていてもそうだが例えば、ずる賢そうな顔付きが一瞬現れ出る時など本当に人間の顔がしてやったりとほくそ笑む様がよく分かる。我々日本人は何かの阻害に慣れっこで、そんな幸せな表情をするのが下手だ。

そうかと思うと彼等はボーイ人生一筋で、他人に仕えてきた習性のためか、それは困ったなァという感じの顔付きになり、顕著過ぎる位にウナ垂れることがある。感情の起伏を取えずに隠さず、却って大きく出すのが当然である社会生活を経てきた伝統のせいだろう。

彼はビール三、四杯を飲み干し、やおらボーイ服の皺を伸ばしながらキョロキョロと辺りを見回して立ち上がった。再び元気そうに仕事にかかる彼へ、我々は何時でもここに寄ってくれと言う印に彼の分のコップをさし示す。彼はにっこり頷く。両者の無言の話はとてもよく通じた。

だが、前後を離れて此处で少し話を飛ばすと、コーラル・プリンセスの船内に只一人だけ当方の示す好意に逆らう形でこちらの常識の範疇では捉えにくい反応を返すボーイ氏が乗り込んでいた。ブロック別のコンパの時などに臨時動員された彼が一給仕として不興げな顔で立ち交じっていることがあった。普段の彼の業務は乗船ホールから船首に近い側にあるこじんまりとしたコーラルバーラウンジのカウンター内でバーテンダーを勤めているのだった。年齢は他の皆よりも若手の方で、やっとな三十過ぎぐらいか。

先にも話した通り我がD8班メンバーの中で私が最も気の合う東梅さんは、彼自身にとっても私の存在が同様であるらしく、夕方のシャワー順番待ちや洗濯等の合間に少し時間が空くと向こうから誘ってくれて、良く二人でコーラルバーに寄って主にコーラかビールを飲みながら個人的な話をするのが楽しみになっていた。

初めて私と東梅さんが連れ立ってコーラルバーを訪れた時、テイン・ウォンという名前らしい気難しい其のバーテン氏が、何故かあからさまに当方を小馬鹿にした顔付きでもって横柄に應對し、中コップに注いだコーラを二杯こっちへ其の不貞腐れたように押し出して寄越した。

「てめえら、オレの手を煩わしてコーラなんか飲みやがって」等とどうやら言いたいらしかった。

目の前であからさまに外国人にそんな顔付きをされても、温和なだけ取り柄の日本人は平気な風を装うことができる。

常に予定調和を心掛け、ああやっぱりそうですか私もそうだろうと思っていましたよ、そう成らないとおかしいですものねと会話の中で年中言っているニコニコ国の一員だ、我々二人も。だからニコニコしながら東梅さんが、正面のボーイ氏の蔑視的表情に気づいたことを知り、私も同じように笑みながらコーラを一口味わい、こう言い置いた。むろん、この無礼なバーテンが日本語を一言も理解できないのを知った上でのことである。

「何だかカウンター内で面白い顔をしていますよ。何か文句が言いたいんですかね？ 日本人全般が嫌いなような感じもしますが」

世間話をしている調子で目の前の男に引っ掛けて、私からそう話すのであった。

「きっとそうだろうね」と東梅さんも笑顔で応じた。「個々のプライドの高さでは日本人がびっくりする程のものを持っている場合がある。子犬の兄弟みたいにくっつき合ってはしゃぐ我々日本人を、小馬鹿にしたくなる者もいるね、本当は、夫々の国民性の違いなんだけれどもねえ、でも、敢えてそれを嫌う者もいるんです」

沖仲仕あがりの彼は青二才の私などよりずっと度胸があり、様々な経験もある。外国船から荷揚げをする時に船室まで行って情報や物々交換をすること等が仕事柄よくあったらしい。それを法律に照らせば違法か違法スレスレの行為なのだけれど、彼はそういう体験を通じて様々な国の男達の特性を見知っているのだった。

このテイン・ウォンというバーテンダーは英語を少しだけ理解し喋りもした。だからバーでビールを飲む時に、こちらが拙い英語で何か軽いツマミをくれないかと頼むと、彼は相変わらず例の高圧的で素っ気無い姿勢を崩さぬまま、それでも他の者に対するよりも我々二人に対してはその態度をやや軟化させたようだった。それは東梅さんと私がちょくちょくバーに通って彼ウォンの無視に懲りず、「やあ又来たよ」とか「今日はまた暑かったね。客が来そうだね」などと簡単な英語で挨拶したからだ。

他の研修性は、ウォンが英語を解することに気づかないらしく、身振りと言葉の広東語一つだけをトォチェ（アリガトウ）と繰り返していた。ウォンも中々に人が悪いのだ。気に食わぬと客の注文をわざと判らぬ振りをする時があった。それに対して日本人が色々な身振りでもって説明するのを奴は冷ややかに眺めたりする。それで彼が、よけいに小馬鹿にする風を隠さぬので日本人研修生は、あいつはちょっと気味の悪い奴だということで、飲み物を手渡しで受け取るとき以外はウォンの前から直ぐ離れてしまい、小さなテーブルの並んでいるラウンジの隅の方で寛いでいるのだった。

だが時々東梅さんと私は、ティン・ウォンの支配するカウンターに^{たむろ}する形をとった。彼の根暗な人格と他人に嫌な気分を起こさせるための応対に対し我々は平然として、正面から分析的な感想などを二人で交えながらゆったりとカウンターに凭れた。だもんで、やがて船がシンガポール港着までには偏屈なウォンもさすがに我々二人の顔を見覚えたようだ。

その証拠に、たとえばシンガポール到着後二日目の夕方のことだ。我がD8班は上陸後にまた単独行で方々見物に歩いた。この街は、香港的大酒樓がない代わりに旨い物を食べさせる平屋建て、又は何千人も入れる大きな露天食堂や露店市場があちこちにあるという。D8班でその一つを見つけたら、明日でこの洋上研修が終わる記念にお別れの大会を催そうとした。

しかし我がD8班は簡単な市内地図を持ちながら何処かですっかり迷ってしまった。囲い砦のようになった集団アパートの静かな中庭を通り抜けたり、たわわなバナナの実と葉が枝に下がる家の庭先にテーブルを出した中華系一家が麻雀をしている脇に出たりで、散々の迷子だった。もう足が疲れてしまい、道端の氷屋みたいな店でマレー人系の黒い婆さんが売る果実の生ジュースを見つけて水当りの心配をしながら飲んだりした。

迷い続けながらその夕方、やっと本船停泊中の港近くまで戻った時、持参の地図には無いと思われる一群の市場棟を見つけた。だが規模が大き過ぎてどこに何があるのかさっぱり見当がつかないのだった。現地人がその市場の周りにワサワサ群がり出ている、これまで見た洗練された街シンガポールとはガラリと雰囲気の違い、いわば何か急に地元の者以外は立ち入りお断わりみたいな雰囲気の町並になったのである。しかし、市場内を行き交う地元の人が、異人風体の我々に不審な目を向けてくることはないのだった。市場の端にはタクシー乗り場みたいに人々の行列が出来ていて、そこに自転車を漕いで引くりキシャという乗り物が次々に戻っては、幌のない座席に客を乗せて出て行く光景があった。

この、人混みがものすごい東南アジア的雰囲気に満ちた市場棟の中のどこかに、必ずや中華系の食堂があるのだろうけど、汗まみれになったほどジメジメと湿気があって蒸し暑い、それに半日も歩き回ったお陰で、目的地をこれから又探すのが億劫なほど我々はややバテ気味だった。とりあえず清潔なシンガポールの町中にいる間は我慢してきたトイレでも一度済ませるか、と例によって小銭を用意しながらトイレらしき方向へ歩き出したら雑踏の波の向こうから見知っているような顔が見えた。

居たのは確かにバーテンのティン・ウォンだ。彼一人で歩いてくる。お仕着せのボーイ服でないから地元の人と見分けのつかない姿だった。すれ違いのを知らない振りをされるかと思ったら、ウォンは、立ち止まった我々の直ぐ前で立ち止まった。我々を人混みから見分けたのだ。いや私と東梅さんに気づいたのだ。単なる散歩なのか彼は荷物も持っていない。

「やあ今晚はウォンさん」グッドイーブニング・ミスター・ウォンと笑みながら言ってみた。シー・ユー・アゲイン・オン・アイランド、リービング・ハー。「船以外でお会いしましたね」

意外なことに彼は我々との場末のような雑踏の中で出会った偶然を少々面白がっている表情をした。さんざん東梅さんと私に船のバーで彼の見える顔付きをビールの無料の肴にしていたのだ。だから今咄嗟に彼を見てもウォンのその表情が今まで知っていた物と少し違う

ことに気づいた。なんだか彼の方では陸で偶然出会ったこちらを懐かしむ感じの目つきだった。確かに彼が向こうから歩いてきた時、独り彼は自身の心を覗き込むみたいに目を落とし気味にしていたのだった。陸に上がった際のボーイは知り合いとて無く、孤独で淋しく、皆あんな顔をしているのだろうかと思っただけだ。

バーテンでもなくボーイでもない今の彼に尋ねてみた。

「ミスター・ウォン、我々はお国の中華料理を食べさせる場所に行きたいのです。が、さっきから街で迷っています。偶然ここに入ってきました。チェーンズレストランがこのマーケット内の何処かにありますか、もしやその場所をご存知ですか？」

彼は勿論と頷いた。知らないはずが無いだろうと言っている感じ。表情からすると此処の市場のことをよく知っているらしい。我々が初めて見る、彼の微かな他愛ない笑みが浮いているのに気づいた。彼は簡単にその場所を指でさし示した。

「この長い棟の仕切りをあっち側へ二つ抜ける。それからまっすぐ右へ進みなさい。とにかくまっすぐに行って。すると、やや客席どうしが空いている大きな店が市場内に見えてくる場所に出る。そこは白い円いテーブルが沢山あるから見れば直ぐ判る。そこに入りなさい。私が保証してもいい、ウェイトレスの仕事は素早いし、この辺りでは一番うまい店だ。そして、勘定もそう高くはない」

日本人研修生がそんなに金持ち（彼のいるバーでの過ごし方などから）ではないと知っているらしく、ウォンは、親切げにそう付け足して言うと、我々のそばをすり抜けるようにして市場の雑踏から夕暮れの表へ向かっていった。そっちが多分、わが珊瑚姫の停泊していると思われる方角だった。ウォンの教えてくれた好い中華料理店のお陰で、我々がその晩、忘れられない宴を催せたことはここで言うまでもない。

ついでに言っておくと翌日、シンガポール下船前に最後の朝食を摂った時、ティン・ウォンの姿が、又やかましい口喧嘩をしているボーイ達の間に見えた。彼が専用容器を提げてオレンジとリンゴのジュースを各テーブルに給仕に来たとき、我がD8班は皆でお礼を言った。すると彼は昨夜ばかり出くわした時と同じように微かに笑み、軽く頷きながら各人へリンゴ液を注いでくれた。しかし、その後のウォンを見ていると他のグループの者がいるテーブルではいつも通りに人を小馬鹿にした高圧的な顔付きを保っていた。

我々は今日ここで下船してしまうが、この船には、今日の夕方日本から空路シンガポールに到着する一団の連中が、我々と同人数ぐらい乗り込んでくるはずだ。日本へ向かう次の航海でもあのウォンは相変わらず洋上研修者達へ、コーラルバーの小さなお城中でカウンター越しに朝のような顔付きを向けるのだろうか。窓側で食べていた隣の東梅さんに、私からそのことを聞いてみると、彼はその通りだと頷いた。一瞬心を開いたように見える面持ちでも慣れ合う日本人と違って、その表情は厳しく閉ざしてしまうのだ、とのこと。でもそうしなければ生きていけない社会の中に組み込まれている国民もある、と答えて東梅さんらしい悲しげで少し寄り目ぎみの顔をウォンの後ろ姿へ向けたことだった。

第八章 船内研修

前章で、特に最後のほうの記述で話の行きがかり上、時間順序を飛び越えてしまったから此処では目を少し元へ戻さねばならない。我々はまだ洋上にある。

船内あちこちの配置が漸く飲み込めてくると、日中の過ごし場所、即ちぞろぞろ歩いてグループ討議（各々が自分の職場の問題点を旅の恥は掻き捨てという調子で語り合う）をしに行く先が、行く所属メンバーの好みにより各グループなりに定まってくる。

サンデッキにある遊泳プール際の日陰を選んだグループもいる。そこでは時々、珍しい光

景が発生した。静かなプールがバチャバチャと水音を立て出し、やがて中の水が大波となってプール側壁を踊り越えて甲板に飛び出すのである。これは下の海面の大うねりが原因だった。又ある時はプールの水位が側壁の片一方へ寄ったまま傾ぎっぱなしになる。目の前に、傾斜をなす水面がじっと静止している様は陸ではちょっと見られない現象で、本船が大きくカーブを切って居る間のみ水位はこのように傾いで見えるのだった。

片や、非デッキ派もいる。出歩かずエアコンの効いた涼しい研修室内に留まる班がそれだ。そこでは丸テーブルを囲むメンバーの中で何人かが足許の床に仰向けのまま寝てグループ討議に加わっているのが常で、此れは必ず船酔い患者だった。もし無理に起き上がると、大きなピッチングとローリングの合成をゆったり繰り返す海の水平線のシーソーが研修室の円窓に覗き、見たくもないのに魅入られた如くそれを眺めてしまい又も吐き気がして目眩が増幅するのだ。

もっとも此の船酔いにかからずとも船中では全員、頭の芯が薄ボンヤリしている。うねりに揺られ続きの脳味噌の働きがいい加減になるらしく、ごく初歩の足し算にすらなかなか応じてくれず歯がゆい。暗算力ががんでお粗末になるからだ。さいわい掛け算だけは九九を習っておいたお陰で習慣的に三三が九などと出てくる。その他の機能は皆いけない。漢字を使おうにも急にその働き面倒な形が思い浮かばなくなる。見れば読めるのだが自力ではレジュメに書けなくなる。朝一番からウィスキーやブランデーを入れ過ぎのせいも多少は、ある。

我がD8班の場合は、その日の気分次第で見晴らしの良い場所を選び、デッキのあちこちを渡り歩いた。つまり夜は船底のゴウゴウ唸るエンジン音でしこたま飲み、昼は多くの時間を健康的で風通しの良い船のてっぺんで過ごしていたことになる。そのため我がD8班員は、船の進行前方の遙かな海上に突如として発生するスコール雲の襲来を避けるため、本船が前以て転舵を切りながら滑るように進む様も一目で良く分かった。本船は大海原を一つ覚えの短絡路で直進するのではない。D8班は毎日のように南海のスコール雲発生瞬間を肉眼で見つけた。あれも実際に自分の目で見ないと信じられないような自然現象の一つだろう。

海面が目眩むほどの日盛りで上空は雲一つ無く真っ青なのに、突然、主に午後からだが遠い海上の一部に何かモヤモヤしたものが見え出す。と、低い雲の塊がじきにこちらへ向けて走り出すような感じがする。それを避けようとして大きく舵を切る本船なのだが、デッキ上からの眺めはスコール雲の塊がこちらへとジグザグに走り寄ってくるように見える。低い雲塊とその下の海との狭間は盛んに白く煙っており雨しぶきのせいで何も見通せない。最初の頃何も知らなかった我々は突如襲って来た南海の驟雨（スコール）に捕まった。次回から海上の見張りに気を配った。本船の舵取り（転舵）にも注意して本船の予定コースがスコールを避け切れないと見るや我がD8班は「来た！」の一声で全員一斉に船内へ逃げ込むようにした。もし十数秒でも逃げ遅れたら忽ち捕まる。辺りかまわず猛烈なシブキを弾きつつデッキを覆う太い白雨でずぶ濡れになってしまう。

無論、スコール来襲に空手で逃げるのではない。丸めた模造紙十枚、何色かのマジックインキ、そしてT定規、消しゴムなどが発表用のレジュメを作る道具だから、わっと腰を上げて逃げ出すとき夫々を誰かしらが引っ掴んでゆく。あるとき一度、九州は博多の石油スタンドの所長が討議中に行方不明になっていて、何処かに彼を取り残してしまった。

その時は九州男児の浅黒い彼が、前夜強引にやった宴の強烈な二日酔いのせいで、「わし堪らんばい。キャプテン、ちょっと眠ってくるけん堪らん、よかと？」と断りを残して甲板の何処かへ潜り込んでいたのだ。その辺りに居るはずなのだが急いで物陰を見回しても寝姿がない。スコール雲はもう目の前まで迫っている、という訳で彼を探すのを諦めて皆はワアッとばかり逃げた。十分ほどで本船は白雨を抜け切ったが丸い舷窓の周りが見えない程の驟雨の量だった。しかし陽でチリチリに熱された船上の構造物にスコール一過は好いお湿

りでもある。たちまち南方の強烈な陽に乾きだす上部甲板へ我々はレジュメと文具を持って戻ってみた。今去った雨が洗ったせいだけでなく甲板の隙間から足裏に付いて来るタールのべたつきが無い。これは前日に中国人ボーイ達がデッキの羽目板の間から陽の熱で浮き出しかけたタールを丁寧に紙ヤスリで擦り、へらでこそぎ落としてくれたお陰である。ボーイ達にとってはこれも航海中の決まった仕事の一つであるらしかった。だから雨で暑さの一時消え去った、さらさらする板床にじかに座り大海原を眺めながら、ちまちました職場の不愉快事項をゆったり話すのに、スコール上がりのデッキはちょうどいい保養地所だった。

さて避難時に行方不明だった石油スタンドの所長氏はその二時間後、顔も腕も魂消るほど真っ黒な姿になって現れた。よく見ればその全身が煤煙まじりの日焼けなのだ。聞けば、このデッキの何処を探しても見当たらなかったはずで彼はこの一段上部にある本船の大煙突の根方でごろりと横になっていたらしい。昼寝に奇妙な場所を選んだものだ。

「スコール？」所長氏は答えた。「ハハハ僕知らんばい。人食い土人に捕まり火炙りにされよる恐ろしか夢ば見て、裸でよう眠ったけん。気分がしゅっきりしたばい」

その口調では本当に火炙りの夢を見てスコールに打たれたまま居たのだろう。そこに大煙突から煤が落ちて載り、そしてまた太陽がこつてりと炙り、彼の全身を黒く焼き上げたというわけだ。火傷みたいな日焼けでヒリヒリするだろうに班員の皆から心配されれば逆に彼は笑い飛ばし、負けん気の強いオコゼみたいな顎をいっそう尖らせた。

「男がこげんかこつで痛かとか言うたらんばい。今夜また飲めば治りましゅけん」と、痛いのは認めながらも痩せ我慢を通した。昔、酒席でひとさし舞って長槍をも飲み干す勢いだったというご先祖の黒田武士なみに豪傑で大変な人だった。

が、この強情一徹者でもある彼が自身ではそれと気づかず、周りの特定メンバーの備えた人の好きや気の優しさを、しつこく苛め気味にからかい、相手の当惑顔を見ることにより、船という密室にいる自身の心の揺れを収めようとし始めた時には、さすがに皆が困った。当人は極めて男性的エネルギーに満ちているから、ちょっとやそつとでは勢いが止まらない。

なぜ船が進むにつれて彼がそんな仲間苛めの行動に出るようになったか細かなその心理はよく判らない。ただ、この乗船記の書き出し辺りに示した如く、陸上とは勝手が違い、逃げる場所もその暇も無い船内では、個人の内なる品性や性根が常よりもじかに剥き出しになり易いという一点に尽きるだろう。ストレスの掛かった人間の心が敢えて取る一時的な回避手段だろうし、そこに派生する行動の全てがその人の本質に関わるものか、それは別だと思いたい。

常に他人と密着し、狭い船室や船内に缶詰状態の続く二週間の航海は、言ってみれば檻に入れられ束縛されたモルモット同様だ。本来自由な人の心の内部に誰しも常ならぬ葛藤が起きる危険性は十分ありうる。それに絶え間ない船の揺れでもって頭の芯もボーッとしている。

慣れない長期の社外研修である。途中、自分ひとり脱落し赤恥をかくのではないかという理由のない不確かな不安もある。厭でも見知らぬ人々と何日間も行動を共にしなければならぬ苦痛、そして息の詰まるような船底の居住区の狭さ、何時もユラユラして踏みにくい足許（体が常によろめいている）、船の豪然たるエンジン震動で不足気味の睡眠、それにより血圧が上がってしまった如く耳奥でウワンウワン云う木霊によってイライラ感も生まれる。それらをどう上手く処理するか、人間というものは結構複雑だから各人でその結果が違う。

わがD8班のメンバーに現れた禁断的兆候から拾って此処に幾つかその事例を挙げてみる。

食品会社の気の弱い相沢係長は何日か過ごすうちに目に見えて一人鬱屈し、他者の発言を聞かずついに自身の弱点をタネにした愚痴しか喋らなくなった。正確に言うと、彼は自信の

在り所を見失い弱々しい女性っぽさが顕著に現れた。彼はD8班のサブリーダーでもあった。そこで年下のキャプテンの私としては、なるべく彼が自ら仲間外れの孤独を選ばぬよう補佐しつつ、果たしてどうなる事かハラハラしながら見ていると、彼は或る時点で急に自身が破滅の限界に来ている客観的状况を意識できたらしい。その事で逆にハッとして我に返ったのだ。そこで彼はきっぱりと男らしく正直に、失態を見せて申し訳なかったと皆へ謝り、何とか平常心を取り戻してくれた。その後の彼はすごく努力して自ら愛想を好くした。但しそんな自身の心の揺れが彼は厭で堪らないらしいが、これなどは誰にでも多少はある傾向で特別に恥じずともよい事だと思う。

次は、四国の経節会社から来ている検査員の伴さんだ。肩幅がっちりした体育系の頑丈な体つきと、やや意地っ張りの顔付きの彼は常々吐くコトバが辛辣で、自他のけじめがきつい人だったが、そのうちに何故か段々と心此処に無い遠い笑みを洩らすようになった。子煩悩な人で実は家族と遠く離れて寂しく、どうにも心の平衡が乱されやはり独り苦しんでいた。その分、口数が減る。飲んでいる時など人の話へ頷きはするが激しい唇の噛み方をする場合があった。彼は内心、四歳の息子の顔が一目見たかったのだ。航海がもう終わりに近づき赤道祭のあった日、三角のとんがり帽子で赤いレイを首にかけ丸テーブルで機嫌よく酔って急に一番はしゃいだのが彼だ。強い男でも家族の愛情から離れると思わぬ乱れが生じるという例だろう。

又もう一人、木島さんは大手自動車会社の技術系の人だ。優秀でクールな人材だが、なぜかある日、酔っ払うしか能のないD8班をのど自慢大会に出そうと決心した。キャプテンとしては彼のたつての薦めを断るわけにもゆかず船底の酒盛りを一時中断し、二晩ほど音楽室へ上がって彼のギターに合わせシャンソンの斉唱を試みた。彼が選んでくれた曲はその歌詞を見ただけで照れくさくなる『愛の讃歌』だった。でも飲酒と煙草で喉がツブレた中年メンバーの怪しく震えるハーモニーを彼はやたら褒め上げ、一同を満更でもない気分させ、本当にのど自慢大会の舞台まで連れていった。クールな技術者の彼の本性は熱血教師であったのかも知れない。本番の審査結果は残念ながらお互いに張り切りすぎたD8班員のがなり声と、木島さんのギター伴奏の進行とが上手く噛み合わず途中で彼が取り残されて演奏を突然中止という有り様。会場はそれこそ大爆笑。そこで我々の酔うような愛の賛歌も沈没してしまった。指揮をした彼が後で悔しげに泣いた。でも出演メンバーは大観衆の見守る前で歌えた(?)という類まれな経験を彼の葛藤から授けて貰えた。これは良い方の例だ。

D8班メンバーの長老である安福さんは講義始まりのテーブルに着くと、或る朝から携帯用般若心経の冊子を取り出して毎回一遍ずつ読むようになった。それが済むと心経の中から今朝の文句を選び、色不異空、空不異色、等とつぶやき、「シキソクゼークウ、クーソクゼーシキ、そない言うてもな、船ではこないな気持ちによ一なれへん、あかんね」と京都弁らしきもので嘆く。それでも研修航海を通して言う精神的安定度では彼が一番だった。

ところが、石油スタンドの所長氏は、よりもよって特定メンバーをしつこいコトバ遊びでからかい苛めることにより、その発散手段をとったのだ。しかも選んだその攻撃相手は、もっとも他人の気持ちに負担をかけない東梅さんだった。なぜ対象が東梅さんだったのかは判らない。

所長氏の話す北九州訛はその語尾にちよくちよく「ばい」がつく。ところが其処に、「どうばい」即ち東梅さんの名をもじった駄洒落をやたらに付けだした。最初こそ聞く側も笑えたが同じことを何遍も繰り返されると、まわりの耳は熱を帯びたように痛み始める。それを少しでも減らす手段は、なぜか他のメンバーも自分の話す語尾に意味もなく、「トウバイ！」と付けてしまうのだった。当然、東梅さんは不愉快になったはずだ。

でも今になって思い返してみると、所長氏の選んだターゲットが緊張気味で気の弱い食品

会社の係長や、時々我々の船室に招待して一緒に飲むお隣のD7班にいる、フォークリフト運転しか知らないという殆ど無口な種田さんでなくて実は幸いだったのかも知れない。

東梅さんが苛めのターゲットになっている事実を、キャプテンの私はある段階まで気づかなかった。この苛めの洋上研修から戻ったら私は、会社の定時後に労組の情宣部長を務めることになっていたから、その下準備の積もりで船内報の発行を、新聞・広報部に入りやっていた。張り切った私は目標を立て、この航海中に過去の最高発行回数のレコードを破ろうと思ったのだ。記録を破れば私の渡航費をもってくれた労組へ一つの手土産代わりにできると浅ましく考えたのである。だから記事作りに費やす時間が欲しいため、我がD8班の酒盛りを独り途中で抜け出る晩があった。後で考えるに新聞発行回数を競うなどは何の意味もない愚行で、一期一会であった我がD8班のメンバーと何故もって一緒に居なかったのかと悔やまれる。

ある晩、我がD8班が湿っぽい船底でなく遊歩デッキに出て心地好い夜風に吹かれながら飲んだ際、途中やはり私は一時間半近く新聞作りで穴をあけた後に戻ってみたら、珍しく早めに解散したのかデッキにはD8のメンバーが三人しか居なかった。その三人もウイスキーグラスは持ちながら口重く、何となく懽然とした面持ちだ。こっちは酒宴を抜けた手前きまり悪く、さあ、やりましょう、まだ宵の口だ、と居なかった一座を盛り上げにかかったら、ずばりと鯉節氏に言われた。

「キャプテン、船内新聞を多く出すのもあんたには大事なだろうけど、それは昼の間にやって夜は行かないって訳にいかないのか？ キャプテンが居なくなると、この班は駄目なんだよなァ。残った者同士が気まずくなってしまうんだ」

そこにいた他の二人、安福さんと食品会社係長も同感だと言う。私は初めて驚いた。

これを聞くまで班内の亀裂にはまるで気づいていなかったのだ。スタンド所長氏が自我を丸出しにしてD8班の雰囲気や勢いを毀しにかかるのを、周りからきっぱりとは止められないのだ、とのことだった。鯉節氏に言わせると、年少のキャプテンの私だが、動きが活発で自分では気がつかぬうちD8班を纏めるのに何らかの歯止めになっていたらしい。

内心、四歳の息子に会いたい寂しい思いの鯉節氏は言う。

「キャプテンは、ほら、皆がそれぞれ喋り易いようにうまく話を振ってくれるだろ、それを聞き上手ってのか？ 本気で皆の話に笑ってくれるし、先を考えながらそれでそれでって次を突っ込んで聞いて人を乗せるのが上手いよ。そういえばオレにもそんなことあったなァって、周りでオレ達も、人のする話を自分の事みたいに楽しめるんだ。そういえばオレの知っている例だけどき、なんてつい喋ってしまって、それで皆の話に乗っていけるわけだ。するとまたキャプテンが、へーえなんて聞き込むだろ。あれが良いんだ。でもキャプテンが居なくなるとすぐ、(所長が)話の繋がりもなしにトウバイって勝手に言い出すから途端にウンザリだ、詰まらなくて班内がバラバラになっちゃうんだ」

知らなかった、年上の方達がこっちの好き勝手をそんな風に大事に思っていてくれたなんて。鯉節会社の伴さんが飾り気も無く言ってくれた不満は、私の宝ものだ。

実は私も、船底の息苦しさから新聞作りの別宅へ逃げる一面があった。やはりD8班と朝から晩までピタリくっついているのが段々鬱陶しくなり、何かクラブに入っている訳でもないD8班の彼ら(木島氏だけは途中から音楽クラブに入った)からひと時だけ離れ、広報クラブに与えられたインクの匂いがする小部屋へ行って持参の酒を飲みつつ適当な事を書き散らし息抜きをしてくる。内心私は、我がD8メンバーの余暇時間の過ごし方をリーダーの任に在りながら、少し苦々しく見ていたと正直、言わざるを得ない。

そして、全く無知の私は何の方策も打たず放置し、留守の間にD8グループの仲間はまさに破船しようとしていた。

「トウッバイ！」とか、「何もしょんからトウッバイ！」とか、意味の無い駄洒落を歌の合いの手のように入れたがる酔った所長氏は、しつこいほど東梅サンを茶化しながら、周りの皆をも白けさせ、それこそ少々強引にメンバーの中心に居たがるらしい。鯉節氏の控えめなその訴えに、長老安福サンと食品係長も脇から頷くのだった。

それでも私はその一度では懲りず、手土産の新聞作りに出かけた。そしてある晩、船底の酒盛りへ戻ったとき、実際に苛めに近い現場と向かい合うことになる。それは実に嫌な見ものだった。何と東梅さんが半ば潜む如くベッドに寝転んでじっと耐えていたのだ。

その翌日の夕方、私はまた東梅さんと二人きりで嘲笑屋ティン・ウォンの居るコーラル・バーの止まり木に座った。この日はシンガポールに入港する前日で、昼に我がD8班は、十チームが競う中から講師によって選ばれたDブロック代表として、映画館を兼ねる大会場の舞台へ班の八人全員で上がり研修成果を発表した。その賞品にジョニ黒を一本貰った。

東梅サンは何時もと寸分変わらぬ笑みで、私にコーラル・バーのビールを奢ってくれた。

前夜はしつこくからかわれた東梅さんの顔がやや歪んでいたのを思い出す。酔った所長氏は中々苛めの軌道修正が利かず、新聞作りかたD8班キャプテンの私は、緊急対策としてついに我がクルーの酒宴を狭い船室から通路にまで拡大することにしたのだった。

意識してそうしたのか自分でもよく覚えていない。とにかく、部屋の狭さとむしむしする湿気に嫌気がさし、扉を開け放ってD8班メンバーを通路に誘い出し気分を変えようとした。通路の天井に並ぶ黄色い船内照明燈が、不思議な光と影の効果を醸す様はちょうど内地の露天で夜のお花見の宴を張っている感じになるのだった。そして少年時代のキャンプ場にいるみたいな解放感も生じる。のど自慢大会ではちょっとばかり気負いすぎて失敗したからここで今から歌い直そうぜ、と誰かが言い出したのも其の切っ掛けだっただろう。よーし、とガラス会社の原田機長がギター代わりに両手の酒瓶タクトをノンノコ踊り風に振り出した。それに乗って我々も本気で朗々と愛の讃歌をハモった。いくら騒いでも誰の迷惑にもならない場所だ。

「もう一度のど自慢に出るか、なかなか好いじゃないよ？」原田機長は大見えを切ってそう言った。

するとその内、思わぬことには他の船室のDグループ所属の連中も、我がD8班の酔って飲み出した廊下の酒宴に気づき、負けじと彼らも手に手に酒とグラスとツマミを持ち、我々の周りに集まって来出した。先輩の沢野さんのグループもいた。

豊富な酒、氷、ツマミをあたり一面に並べ合い、狭い廊下（通路）で合同の一大酒宴となる。来るもの拒まずでお互いがべったりと床に座り合い、相手のグラスへ値の高いブランデーをドボドボ注ぎ合うのだ。もう理屈も糞もなく、同じ船に乗ってるんだ今が好い経験だつうの、オレはね人間が好きだ、とにかく遠慮して言わなかったこと思いついたこと、いくらでも此処で話してパーッと飲もうよ。コーラル・プリンセスの廊下で宴会するのはオレ達が初めてじゃないかなどと変に喜び合い、へらへらはしゃぎ単一民族性が剥き出しになってゆく。

私は下着一丁のまま原田ガラス機長と組んで何かの舞い踊りをやったらしい。パンツの間から空ビンを揺らして、ノンノコ、ノンノコと卑猥に踊る原田機長直伝の舞いだ。全く覚えていないがそのまま廊下でべったり倒れD8班の皆に担がれた私はベッドの上段にそっと寝かされたそうだ。何せ翌日はDブロックの代表チームとしてD8班が総合発表大会に出ることになっている。もし発表役のキャプテンであるこ奴が、ひどい二日酔いのまま起きてこられないとなったらD8班のいい恥曝しだし、班内の別の誰かにその発表役が厭でもバトンタッチされ、他が大迷惑になる。早く寝かせてしまうに限るという事だったらしい。

先輩の沢野さんは、酒を飲み過ぎると急にバタリ倒れ意識を失ってしまう私の酒グセの悪

さと、そうなった時に翌朝は約束事など一切守らなくなる怠け者ぶりをよく知っているのがある。だから彼が、D8班メンバーに飲ませて早くダウンさせてしまえ、途中そう入れ知恵したらしい。誰だって見知らぬ大勢の人前に出て活動発表なんかしたくないに決まっている。

その甲斐あって事例発表もどうにか無事すんだので私は、次は東梅さんの内なるダメージが心配だった。

「トウバイって悪ふざけで呼びつけられるのは厭でしょうね、良く分かりますよ」

などと、しかし年長者である東梅さんに私からは到底言えない。私はカウンター上の冷えたビールを一口含み、隣の東梅さんに今回の出張にお小遣いをポンと百万円くれたという海運会社の女社長へのお土産は何を買って帰る積もりですか、などと当たり障りのないことを聞いた。

「土産は何も要らないと念を押されましたけどね、ハンドバッグが好いかな？」ソフトな声で彼が答え、その声には何の悩みの影もないようだった。こっちは、それだけでもつくづく安心した。だからつい私の口が軽くなった。

「百万円もの銭別じゃ、ハンドバッグにしてもブランドものをよっぽど選ばないと駄目ですよ？ 社長は、デザインなんか好みが見ついんじゃないですか」

「うん、でも、それだけでもない」やや藪眺みの彼の目がさざ波のように笑む。唇をビールを味わうように窄めるのが彼の癖だ。話題をいつも面白がっている顔付きでもある。この人の表情は、ものを味わい深く楽しむコツを知っている苦労人と私に思わせた。ダテに生きて来た訳じゃないことが現れている顔相だ。その目がキョロリとこちらへ向く。

「当社はシンガポールに事務所があって駐在員が何人か居ます。だからこれは、日本を離れているその人達へ慰労をしてあげなさいという意味を含んでいるんだと思いますよ。ですから、このお小遣いは僕のも物であって僕のものではないんですよ。社長は一言もそうは言いませんでしたけどね、私の金の使い方に多少は期待していると思いますね。明日シンガポールに着いたら、彼らが港まで迎えに来てくれることになっています。出る前にボクが思いついて彼等の留守家族一人一人に書いてもらったメッセージも持って来ています。キャプテン、明日はD8班の行動から半日ぐらい失礼させてください。向こうの彼らも僕が研修船で来る目的の一部はうすうす判っていると思いますね。待ち兼ねているかな。私が預かっているようなお金のことは知らないだろうけど、日本や家族のことを気安く直接に色々聞ける嬉しきで、ね。海外からの通信は意外と費用が嵩むものなんです」

「へーえ？ そうなんですか」 当時はまだインターネットの一般普及する以前だ。携帯電話などという物も無かった。

彼の思い遣りあるコトバに感心してしまった。だとしたら、沖仲仕あがりでこれといった役職肩書きも無いらしい東梅さんを、シンガポールが最終寄港地であるこの洋上研修に出してくれた女社長というのは、ずいぶん目配りの効く凄い人だ。

きっと昔から彼の人柄をよく知る老練な女性経営者なのだろう。その女性用に彼がハンドバッグを選ぶ時は、ぜひ下手な英語の通訳でもって同行しようと思った。売り込みに彼が騙されてはいけない。東梅さんは横文字がからきし駄目なようだから。

「個人的にも東梅さんは社長をよくご存じのようですね？」と聞いてみた。「海運会社の仕事面でピリピリした恐い人ですか、ハハ、それは勿論ですよ？」

「あ、うちの社長ですか、いや年寄りの私には優しい人ですよ。可愛らしくて、ほっそりとして少しはにかみ屋さんでもありますね」

東梅さんは小麦色の濃いビールを美味そうに喉に流し込む。その表情に私は何だかはぐらかされたような気がした。今夕もまた、我がD8班の酒宴時間が近づいている。彼は、今夜

も石油スタンドの所長氏にからかわれるかも知れないのに、その寄り目勝ちとも思える笑みを全く崩さないのだ。私はやはりこの人の持つ雰囲気が好きだな、出会えて良かったと思った。でもその時、彼の今のコトバの中で何か引がかかった。

「可愛らしくて、少しはにかみ屋さんですって？海運会社の社長がですか？」

私は、東梅さんが何気なく言っただけのそのコトバを、もしや聞き間違えたのかと思い問い直してみた。この人は荒くれ者が大勢いる沖仲仕の出身なのだ。そう簡単に使いそうもない類のコトバだった。しかし東梅さんから返った答えは実にあっさりしていた。

「そう、ウチの社長は先代社長の娘さん、二代目ですから」

東梅さんの言い方には、そのシャイな面のあるらしい女社長を柔らかく包み込んでいる響きがあった。

「まだ二十四で独身ですからね」

と、東梅さんが呟くのが聞こえた時こちらは愕然とした。えっ二十四歳、それではまだ小股に毛の生えたほどの小娘ではないか、F海運の社長というのは。でも東梅さんをF海運として初めてこの洋上研修へ派遣して、しかもポケットマネーをポンと百万円プレゼントしている。その娘社長の頭の中はどうなっているのだろうか？

私は知らぬうちに眉をしかめたらしい。よその会社の内部事情は封建時代のよその藩みたいにも実態が知れないものだ。でもそれを隠すのでもない東梅さんはビールを飲み干して、バーテンダーで冷たい雰囲気の中国人であるティン・ウォンの馬鹿にしている顔へ、ありがとうと日本語で言った。もう船底へ戻る時間なのだ。

航海の当初から二人でこのバーに来ると東梅さんが必ず毎度出し、私はここでの支払いを一遍もさせてもらったことが無い。彼は優越感を得ている訳でなく、特別に奢ってやるという風もなかった。いつも淡々と酒代を払ってくれている。その理由は単純で、私に小遣い銭の余裕がないと彼が知っているからだ。

「東梅さん」私は止まり木から既に降りた体格の小さめな彼へ呼びかけた。

トウッバイ！と今夜も又しつこく言われるようでも我慢してくださいね、なるべく所長の気を逸らすように努力してみますから、と言うつもりだった。

だが、少し眠そうにも見える目をこちらに向け直した彼は苛めの待っている部屋へ戻るのをちっとも嫌がっては居ない風に笑っているのだった。そこで彼は私のほうへ身を少し寄せ、私より低い背丈から少しいたずらっぽくこちらの顔を覗き込んだ。

「実はウチの社長がまだ赤ん坊だった時、僕はもう沖仲仕の差配をしていました。刃物を振り回す奴や、薬で狂ったみたいな奴、力でしか言うことを聞かせられない奴、そんなのばかりでしたよ。だから私は力を使わない事にしたんです。先代の社長は、そんな私の遣り方に目を掛けてくれ沖仲仕の中から事務所に引っ張り上げてくれました。今の仕事は楽です。私の人生は恵まれていますよ。だからキャプテン、私のことは心配しないで下さい。恐らくキャプテンが知らないような酷い修羅場も何度か潜って来ている。それより今、若社長の話をしていたら思い出した。彼女が小さかった頃、そうだな一才半位の時に事務所でおむつを替えてあげたことがあったのを思い出しました。彼女の母親は若くして亡くなっています。その赤子から使い切ってきたと貰った百万円を今持っているのですよ。不思議な巡り合わせですね。生きて居るって、良いことです」

そう言った東梅サンは、ね、そうでしょうと付け加えるみたいに鼻筋にしわを寄せて眼鏡の下でニッと笑み直す目顔を作った。この人はとても魅力ある男だった。

彼はシンガポールに駐在している人たちに忘れ難い印象を残して行くことになるだろう。それこそ彼を選んだ若い社長が望むところだろう。傍らでその場面を見られないのが残念だと思いながら、私は彼と並び船底への長い階段を降りていった。

第九章 シンガポールの二日間

1. マンダリンホテルにて

自動車ガラス成型現場の機長こと坊さん（原田氏）が一戦おつき合いしてみたいという美女を捜しに通訳兼交渉役として私は此処へやってきた。予想していたよりも天井低く、辺りに熱帯的色彩の濃いマンダリンホテルの一階ロビー、その受付カウンターが良く見渡せるソファーに陣取った。シンガポール上陸第一日目の夕刻のことである。

無論、同行者は原田氏であり当人は武者震いと緊張とで石みたいに押し黙っていた。

そして我々二人とは別に、D8班から有志二人が名乗りを上げ、直接絶世の美女とのおつき合いは望まないがその姿を唯一目だけでも眺めてみたいと願って、マンダリンホテル内までこっちは無関係の振りをしながら興味津津で付いて来ている。それで今此処には目を皿のようにして唾を飲み、きらびやかな傾城の出現を待つ四人の男が居た。

一方、我が班の残り四人のうち、東梅さんと木島さんの二人はそれぞれの会社の当地駐在員との食事会に行っている。そして、あとの二名、買い物ツアーのバスに居残った安福サンと鯉節氏の両者はたぶん今頃、宝石加工店で、腹巻きから二十万円ほど出して握り締め、保証書付きの首飾りをそれぞれの奥方へのお土産に求めているはずだった。

だからもう一度言うと、美女捜しのため今マンダリンにいるのは、ファースト・コンタクト及びバトルを希望のガラス機長原田氏、未経験の通訳だけをしてみたい私、そして美女見物だけを望んでいる食品会社係長と石油所長の四人だった。

中で、姿態が最もコチンコチンになっているのが例の秘薬、香港で仕入れた最高級の三鞭丸（さんびんがん）を飲んで此処に臨んでいるガラス機長だ。幾粒も呑み込んで来たのだろう。坊主刈りに近い青い頭の下顔を不自然に真っすぐに立てて小刻みに震え、時々首を回しては凝ったらしい肩を揺する仕草でコキコキと関節を鳴らしている。

シンガポールでも高名なマンダリンホテル、ここは遠目にも照明に映える外観からして華麗な全体の作りが我々を圧倒した。でも思い切って中へ入ってみたら宿泊目的以外の部外者でも排除される訳でなく、受付フロントのあるロビーを歩き来する多くの人々の間に紛れ込むことが出来た。また意外にそう広くもないロビーには何本か天井を支えている太い大理石の柱がある。直径一メートルほどもある円柱である。ガラス機長の得た職場情報では、この丸柱の内の辺りから絶世の美女がその気のある殿方を求めて出現するのだそうだ。そういう目で、改めてこのマンダリンの内部を眺め直すと妙に艶めかしく、或いはそうかもと思えて来る、品格では一流でもなさそうな賑い振りで下世話なこの雰囲気だ。

此処には背凭れの無いソファーが柱回りに幾つかある。食品係長と石油所長は早くも我々からやや距離を置き、そこに座り込む。彼らはそこからキョロキョロ見回している。でもロビーは太い柱が数本有るため、位置によってはちょっと見通しが悪いことは悪い。

私は実は此処に来てみてから急にガラス機長の職場情報に疑問を覚えた。なぜなら先ずその一つは、こんなに外国人宿泊客のキリも無く到着し波の如く往来し混雑するロビーに、その手の美女がやってきてカモを漁る商売が成り立つだろうか、である。大荷物の旅客が入って来ては一々その捌きに中々込み合うこのような場所で、殿方を魅き入れるような笑みを見せたとしても、それを受けとめる余裕が一体客側に果たしてあるか、大いに疑問なのだ。

二つ目は、このホテルの女性従業員である受付嬢達の服装。これがなにせ凄い。イギリス人船長の妻の、作業用つなぎ服に入れたスリットのお色気など目じゃない。此処の物は、シルク光沢の黒いチャイナドレスの両脇を、裾から太股の上までバッサリ切り込んである。そ

の姿でもって彼女らは颯爽と闊歩し接客に歩き回る。すらっとした形の好い長い足が、チラリチラリから、時にフワリと捲れるドレス裾の間に大胆にも見えて腿の上部までそっくり現れ出るのだった。ああ南無三、もう少し上迄ならと涎が出そうな男の目を、その歩行ぶりへ釘付けにしてしまうのだ。日本のホテルフロントみたいに受付カウンターに只突っ立っているのではない。黒いチャイナドレスのスリットを翻して盛んにあちらへこちらへと行き来する。しかも見るからに宝石と言っても良い濃艶な東洋の美女ばかり。眺めて居るこの心がぞくぞくするほどだ。

もしかしたら此の美女達が、ガラス機長の職場情報の大元なのではと思えて仕方がないのだった。先達の彼らはその見学体験を自分で望んだ妄想に近く作り替えたのではないか。でもガラス機長が、柱の陰からきつとお相手の美女が現れると期待し緊張しきっているのを見れば、ヨタ話だったのかも知れませんよと諭すわけにもゆかない。

石油所長が背の高い身を立てて嬉しそうな顔で寄ってきた。獲物を見つけたという感じ。「キャプテン、美女のおりましたけん。ほんなごつ、しゅごかばい、トウッバイ！」

果たして彼がそっと指し示したのは間違いなくホテルの受付嬢の一人だった。確かに凄美人でスタイルが抜群に素晴らしい。男だったらズボンを脱ぐ前に見ただけでクラクラしてしまうだろう。柱の間から人影が突然出てきたりするので、他にもチャイナドレス着用の女性客がいるこのホテルでは旅客と受付嬢の区別が付かない時がある。

私は、独り悦に入って小鼻を膨らませている石油所長氏へ小声で言った。

「あれは、このホテルのフロント係です。ラメ入りの黒色系チャイナドレスは皆このホテルの従業員ですよ。歩き方もスマートで洗練され、客の欧米女性よりずっと輝いています。ほら、頭に物を載せて歩いても決して落ちないような姿勢をしているでしょ？」

「ほんなごつ？ しかばってん、信じられんばい。美しかとォ！ キャプテン、彼女へ英語で話しかけてみんね、幾らじゃと、トウッバイ？」

石油所長は素っ頓狂な声が大きい。冗談じゃない、そんなこと従業員女性へ訊いたら即座にシンガポール警察を呼ばれてしまうだろう。何しろ此处は公道に煙草の吸殻を捨てただけで法律により罰金を科せられる国シンガポールだ。道端での立ち小便も厳禁なのだ。

石油所長はもうその目が、颯爽とロビーを横切って行くチャイナドレスが洩らす大胆なチラリズムに魂ごと吸い寄せられている。いやこっちの目だって其処へ一緒に付いていってしまうのだった。此の目を引き剥がすのが一苦勞でチャイナドレスと云うのは凄い威力だ。この衣装着用を禁止しない清潔国のアンバランスが変な気もする程だった。

現れぬ美女を待ってどんどん過ぎて行く時間は、しかし徐々にガラス機長の緊張をほぐしてもくれたらしい。というか機長は最高に高まった緊張の持続を保っていられなくなったのだ。彼自身がその所期の願いを通り越して、受付嬢たちの大胆なチラリズムの往復を眺め出した。お色気の現出が見事に露骨で美麗でもあるそれは、眺めているうち次第に男の下心に微妙な反省心を生じさせてくる、その反省はなにも倫理的な傾きのものではないがチャイナ服のスリット姿が余りにも官能的に視覚へ訴えるので、女性の姿態が完璧な美のように思えて空恐ろしくなる、といったら適當か。女達はあのスタイルを保つため相当な訓練と克己心と、性格的にも隙の無い美女が選ばれていると自ずと男心に悟らせもするのだった。男という子犬は、何も単に女が欲しくてハアハア舌を出しお手をしている訳ではないらしい。ちゃんと現実状況というものに目配りをする事ができるようでもある。

もし仮に、美女と二人きりになれたとしてもコトバが通じなくて一体彼女と何を話すわけよと自問が始まる。この辺を考えるとしてしまうのが男の生理の弱い一面だ。したいことは一つしかないのだから、まっしぐらに突き進めばいいのだが、そこへ至るプロセスが急にあからさまなものとして浮かび上がり、心に障害物を持ち出してくる。もし障害物が出て来なくなっ

たら、ただの性犯罪者に陥るだけである。また戦時におこる敵国婦人への陵辱などは男からこの辺のスイッチが省かれてしまうからだろう。

自分の周りを官能的な女体を取り巻く、抗しがたい闇雲な妄想からシビリアな現実認知へと真逆様に落ちてくる。ガラス機長の顔つきが変わったことでそれが判った。つい今し方まで彼の目に窺えた、なんとも言えぬ欲情の昂ぶり輝きが掻き消えて、多分われわれと同程度の用心深い小心さが戻ったようだった。結局、チラリズムの肢体の闊歩は無料で存分に見ることが出来たが、ついに絶世の夢の美女は現れなかった。

この第一夜、上陸門限の九時までに戻らなかったグループがある。各グループのリーダーは全員の帰船を確認し、担当講師の元へ報告しにゆく義務があるのだ。

研修規則では門限までにグループ（八名単位）の一人でも戻らぬ場合に先ずその班は見せしめのため船室には入らせない。主催者代表の例の船内放送が、門限厳守に違反があったとグループ名を告げる。するとそのグループの者は指定された場所（乗船ホール）に行き、陸から最後の一人が戻るまで待ちぼうけを食う。また、ある幅以上の違反時間が進みそれでも誰かが戻らぬと罰則が一段階上り、その者が現れるまで何処そこに待機せよとそのグループの所属ブロック全体にも船内放送で召集がかかる。そうなってくると門限を守った他のグループまでが大迷惑を蒙る。やがて夜が更け、我々とは別のブロックがそうになった。

翌日、門限破りの訳が知れた。やはり、その手の社交女性を集めた家に行き夢中になっているうちすっかり門限を忘れたということだった。その男が不幸だったのは、ガラス機長が先達より受けた情報より正確なものを持っていた、というだけのこと。

2. リキシャ

意外な一面を垣間見せたボーイのティン・ウォンとシンガポールの港に近い市場棟の中で、我々の迷っている折に偶然出会った件は第七章に少し書いておいた。

さて、その彼が示してくれたとおりの方角へと進んだ我がD8班はやがて労せずにとっても大きな大衆食堂のような建物内へ自然に入っていった。香港大酒樓の豪華さはないが、暑熱の地であるせいだろうか店内は全体にきっぱりしたクリーム色、さんざん歩き疲れた我々にはホッと一息つける店の印象だった。これはシンガポール上陸の二晩目であり、もう明日は宵闇のチャンギー空港から飛び立ち二週間ぶりに日本へ帰れるのだ。だから今宵は我がD8班の打ち上げの意味があった。香港での時の如く中華系銀行で日本の円をシンガポールドルに換金し、ごっそり札束を持っている。此処の通貨も日本国のお札感覚からするとよく見分けが付かず、赤っぽいのが灰緑色があるなァと思うだけだ。お土産になるほど美しい紙幣でもなし今夜中になるべく使い切ってしまうなくてはならない。明日は一日を通しバスで集団行動なのでD8グループとしてのお金は不要なのだ。

我がD8班八名のうち将来再び此処シンガポールを訪れることが出来る者は一人もいないか知れない。ひとつ今夜は大いにたっぷり食べ納めをしよう。だったら四の五の言わず中華にかぎる。例によって漢字ばかり並ぶメニューリスト（菜譜）を眺め、およそこんな料理であろうと字面で想像しあれこれ頼んだ。此処は料理を運んでいるのがボーイではなく中華系の身ごなしの素早いウェイトレスだ。他の席がまだ余り埋まっていない宵の口の今彼女が一人で各席を回っている。冷たいオシボリも彼女が出してくれた。

我々が値段欄など気にせず頼む積もりなのが彼女にはすぐ判ったようだ。機転の利く陽気な娘だった。コトバは英語も殆ど通じないのに手つきや身振りで、「これは海老と辛い物の炒め、二皿がちょうど良い」とか、「これは豚肉を蒸して何かと一緒に漬けたもの、とても美味しいから是非これになさい、大皿で来るから八人で二つは多いよ、一皿で充分」とか、「これ

はアヒルを丸焼きにして何かのソースを掛けてある、他にも具が添えてあるから丸ごと一羽で充分」とか、「そのとおり、これは麺である。もちろん麺はスープに入っている。色々な具が載っている。アイヤーこれを最後に一人一つずつとったら大変よ、お腹パンパンに膨れてしまうよ。平気か大丈夫か？だったら半分になさい。お皿を別に持ってくるから皆で分け合ったら？」とか熱心に教えてくれるのだった。

冷えたビールを欲しがっているのも直ぐに分かってくれた。此処のビールは緑色の小瓶に入ったシンガービアーという名だった。シンガーは獅子を指すらしい。

我々のテーブルからかなり距離のある奥の方の厨房口で彼女が、今の大量注文を大声の中国語で伝え、それへ厨房の中から元気旺盛な声の返るのが聞こえた。そして、急に厨房の中が活気付くのが遠くからでも分かった。野太い男の声が盛んに号令を発し出したのだ。強烈な火力に躍らす鍋の反転音や中華具材のジャージャー鳴って熱そうな耳そそる音が、天上の高いだっ広い客席まで響いてくる。天井には大きなファンがゆったり南国的に回っており見上げる内に待つ程のことも無く、颯爽と歩く彼女が最初の料理を運んで来た。

日本であったなら料理をこのテーブルの上に置いてそれでおしまいだろう。だが、彼女のやり方はいささか違った。我々のテーブルに皿を置く前に、周りの地元客へその料理を高々と掲げて見せながら彼らへ何やら意気揚々と言い放った。それが嬉しげなのである。それに対して周りの客が、ホーッとばかり感嘆の声を洩らすのだった。一体彼女何を言ったのだろうかとD8班メンバーは周りを見回した。すると、近くや遠くの席にいる地元客の顔が、まるで悪気なさそうに我々の方を眺め友好的に笑っているではないか。それを見て一安心すると同時にこちらからも控えめな笑みを返した。

おそらく此のウェイトレスは今持ってきた料理名を言い、これから続いて出てくる料理のことをも公言したらしい。思うに、どうやらこういう客（日本人と分かったのだろう。もっとも我々の父世代はシンガポール島を占領していた時期がある）が訪ねてくるほど、この店が他国の人にも知られ美味しいのだと宣伝したらしい。それに、その料理を頼みなさいとアタシがこのお客さん達へ勧めたのだ、とでも誇らしげに言ったような雰囲気であった。このウェイトレスには店内のムード・メーカーのような特長があったのだ。少し後、熱い料理を食べたら顔中に噴き出してきた汗に冷たいお絞りの追加を頼んだら、彼女はそのお絞りを単に渡してくれるのではなく、まず指先で皿回し的にクルクル回転させハンケチ状に広がったのをこちらの手へさっと落としてくれた。お義理でなく巧みなサービスだ。それに得意気なその笑顔のせいで、そこはかたない可笑しみが現れ、素早い仕草は曲芸のようだが決して押しつけがましくはない。お絞り一つとってもこちらの目を大いに寛がせてくれるのである。

さて料理の件だ。運ばれて来た品は、例えばエビチリソース。日本でも中華料理に出てくるけれど、あれは此処の物とは違う。日本で入っていた海老は痩せて小さく水気無く萎み、海老独特の香ばしさにも味わいにも欠けていた。此処の海老は全く違った。世界の何処へでも買い付けの手を伸ばす日本商社の目を逃れているらしい。尾の部分の太さが親指位もあり、ブククリして噛めばブルルンという弾力がある。噛み切った途端に歯が、「ワオウ！これって海老の肉ーッ」という喜びの感知信号を脳へ送り込んで来る。こういう旨い海老に自分の生涯で初めて遭遇したのだが、脳内に先祖から伝わる識別感覚は確かにこれが海の幸であると知っているのだった。私より太古まで遡る悠久の過去に祖先の誰かがこれを食べている、だから今判ったのだろう。但し、姿が人間に近い形になってから食べたのだとは限らない。まだ私が甲殻類を好む魚であった頃かも知れないが、とにかくこれを知っている。海老の肉がそれを思わせたのが不思議だが、事実そうなのだ。

たとえば卑近な例だが子犬でも、彼が食べたことの無いはずの鶏空揚げの骨を与えると一瞬も迷わず噛み砕き、髄をも愉しみ食べ尽くしてしまう。あれと同じであろう。また、成犬

であっても、たとえば初に焼き竹輪を与えてみると犬は一旦銜えるがその奇妙な弾力の歯応えに怪訝を感じるやポロリと口から落とす。そして再度匂いを嗅ぎ直し、変だな知っている匂いなんだがどうも歯触りが今一だな、親方こいつァ一体何なんですかいと問うような目付きをこちらへ上げるのだ。

また太古からの記憶には無い、もっと進んだ高度な食べ物。たとえば発酵を利用した納豆が食べられない人もいる。出身地に伝統的に納豆がない場合ほどその傾向が強い。私はチーズが食べられない。あれは外観を見ただけで口中に石鹼の味がしてしまう。

話が段々横に逸れて行きそうだ。とにかくこの夜食べた料理はシンガポール経済が中華系の人々によって動かされている証拠を体験することになった。どれをとっても香港の大酒楼に負けない味わいと手の込みよなのだ。野菜、肉、魚など食素材そのものの貫禄も日本の大衆食堂がスーパーから纏め買った物とは断然違っていた。

周りの人が食べている皿の物も旨そうだった。ためしにメニューから値段を換算してみたら、ここでは豊かさをそう散財しなくても目の当たりにできるのだ。

この日の昼、シンガポール市中で道に迷いながらも途上で出くわした市場では当店の料理の元となった物と同等と思われる食材が魚でも肉でも野菜でも一タパック詰めされず剥き出しでいくらでも並んでいるのを見ることが出来た。又、ある一軒の民家の広い庭先では、流しのタクシーの運ちゃん達が昼飯時に色とりどりの煮物や漬け物を選んで、おかみさんに装ってもらいゆったり食べている姿が見えた。如何にも旨そうだったので我々は路線バスを降りて運ちゃんばかりが居るその庭先へ恐る恐る入っていったのだ。

店と云っても、ただの民家の広い庭先に椅子と円テーブルを並べただけ。でも軒下に煮炊き道具を一式備え、三十種類ほど作ってあるおかずはいかにも優れ物の感じがした。先ず煮物の深い色合いが好い。蟹なんか釜一杯に赤黒く茹でられ、つい手で甲羅を剥がしてむしゃぶりつきたくなる。色は日本の醤油と違うのだが、それと似た物（魚醬）で味が調べてあり日本人には親しみやすい。おかみさんに個々の値段を聞くと、耳をほじり直したくなるほど安かった。食素材や調理法にそういう豊かさの窺える国なのだった、シンガポールは。

あの利発なウェイトレスが遠い厨房口の前から我がD8班の注意を引くような仕草をした。気が付いてそちらを見たら、ちょうど彼女の隣に遠目には海坊主みたいな感じのする一人の巨漢が現れ出たところだった。我々は美味い料理による満腹感で一種の恍惚状態にあった。しかし、どうやらあの機敏なウェイトレスが我々一行に、あんた達が今食べた料理はこの人が腕を揮ったのよと教えてくれている気がした。単純ともいえる日本料理の鮓や刺身や鍋物と違って中華料理は作り手のワザがもっとアンサンブル的に客の口に入るし、複雑な其の旨さに知る喜びも大きい。その感謝の意味を込めて我がD8班は、恐らく厨房のコック長と思われる中華系の巨漢へと頭上で盛んに手を振った。

するとその巨漢へ小さなウェイトレスが何か言うや、男は手に提げていた青竜刀並の大包丁を嬉しげに我々の方へ振り返した。ああいう物騒な大物でぶった切った料物が、日本食にない豪快な味わいを持つのは当然のことかも知れない。

オレンジ色のお仕着せを着たあのウェイトレスに勘定をしてもらった後、こちらの手にはまだ使い切れないシンガポールの紙幣が何枚が残った。全部でどれ位に価値するか判らないが一枚だけあった価値の有りそうな赤っぽい札を選び、感謝の印として彼女へ差し出した。我がD8班にあと必要なものは此処から港内まで戻るタクシー代ぐらいが有ればいい。それは恐らく小汚い灰緑色の札かポケットにある小銭で済むはずだった。それでも残ってしまうだろうシンガポールドルについては明日の下船前に、部屋係の中国人ボーイに我がD8班の気持として全部あげてしまう積りだった。

ウェイトレスは彼女の手の平に載った一枚の赤っぽいお札を見下ろした。何か不審に思っ

たらし、その札から目を上げて何か物問いたげな視線をこちらへ返した。それは今までの彼女に無い、驚きを含む、現実が信じられないかのような妙な目付きだった。だが、我がD8班の者が皆でとても良くしてもらったから勘定とは別に彼女へチップを上げようよと言いつつ合っていた気配に、聡い彼女は気づいたはずだ。それに今や我がD8班の全員が彼女へと、楽しい給仕ありがとうの笑みをニコニコ向けている。だから当然、その赤いお札がチップ代わりとして全く彼女個人の物となったことは推測しただろう。

突然、彼女の両手がお札を自身の胸元へ引きつけた。これは貰って好いのだと、はっきり判ったのだ。それから彼女がしたことは、逆に我々を驚かせた。

「皆さん見て、注目、こちらを見てッ！」

と、中国語で短くそう言ったのか周りのテーブルへ呼びかける感じの声を立てた。そしてその赤っぽい札を両手の指先でピーンと張らし、額の前方へ高く翳した。そしてまた何か声高に言いながら、周りのテーブルの客によく見せる為、まるで賞状を貰った時の子供のように目顔も晴れ晴れしく直立したまま体の向きをグルグル回した。

「どう見て、この外国の方達、アタシのした仕事の良さをちゃんと分かってくれたの、アタシいま幸せよ」とでも其の上気した笑顔は言っているのか。

すると周りの地元客が惜しみなく彼女へ拍手した。それはお前のサービスが良い稼ぎにつながったんだおめでとう、という賛同の感じだった。日常的にチップの通用する社会ではサービスに対する返礼額の多少が個人の評価その物になるのだろう。彼女がお札を翳しながら拍手のなかで誇らしげにピーンと背筋を伸ばしたわけだ。

どうやらその赤いお札はシンガポールドルの中では最高額紙幣だったらしい。彼女の笑みと客の拍手物のお蔭でチップの上げ甲斐があったわけだ。

我がD8班は此の大きな市場のそばからリキシャに乗って港の入り口へ戻った。リキシャはペダルを漕ぐ運転手が、二人掛けの座席がある小型の二輪車を引っ張る物。客の目の高さはかなり低い座席でリキシャの漕ぎ手の足脛がよく見える位置だ。南国人特有の痩せて締まった筋肉質の脛がどんどんペダルを漕いで、暗い街の底を滑るように走ってゆく感じだった。交差点の角では自動車の間を堂々とすりぬけてゆく。

路のせまい裏町を通り、酒場のように小さな赤いネオンの点いた家々を何件も浴道に見ながら進んでゆく。歩いたらきつと暑苦しいはずの赤道直下の夜間の空気が、自転車を漕ぐスピードの分、涼やかな風として顔や身体をなぶってくれるのだった。

見上げると、青いような暗い夜空へシンガポールの裏町にそって尖った屋根がシルエットで浮かび出ている。それが何処とも知れず次々に連続的に過ぎてゆく。リキシャの運転手は痩せた中年男なのに一休みもせず何事も言わず、路の角を目一杯のスピードで曲がり続ける。ポケットの中に残った小銭を全て彼に上げたくなってきた。そして港で降り際に運転手から啞然と呆れ顔をされたが、我々は実際にそうしたのだった。

翌日の晩、チャンギー国際空港の端で金属的なジェット音を高めていったチャーター便の旅客機が急にエンジン出力を絞って小震えを弱めた。離陸の定刻を過ぎても搭乗機は直線の滑走路へと進入せず、やがて機長より日本語の機内アナウンスあり。

「エンジン不調のためこのまま飛行せず、エプロンへ引き換えし、修理を行なう」

とのこと。そりゃそうだろう、そんな状態で日本へ向け真夜中に七時間も飛ばれては困る。途中で墜落して全員死亡のニュースではたまらない。

次に機内アナウンスは、耳に親しいもの柔らかな日本人女声に替わり、こう続けた。

「...なお、その間、お飲み物を自由にお楽しみください、ただ今よりスチュワーデスがお席までご希望のものをお持ちいたします」

ありがたい、タダ酒が飲めるのだな、飛行機がエンジンを直している間は。だがこの種のサービスは何処かで経験したことがあるような気がする。どうやらこの日本機のキャプテンもグッド・デインジャラス・シップを操るのが仕事らしい、そう思った。

以上

(※仙台在住の板見潤一君に方言その他の指導を頂きました。感謝)